

Newsletter

October 2025

<http://www.aack.info>

目次

追悼 齋藤惇生さん (2025年3月11日逝去)	資料 齋藤惇生さん略歴.....25
酒井敏明さん (2024年12月3日逝去)	齋藤惇生さん・酒井敏明さんへ
齋藤惇生さんへ	追想昭和29年夏山 (二人のリーダー)
齋藤惇生 Yさんを悼む	川崎 徹.....26
本仁久一郎.....2	酒井敏明さんへ
「ワイさん」	オシメを想えば山恋し
左右田健次.....4	左右田健次.....27
伝え遅れた感謝のことばをここで	酒井先輩へのことば
谷 泰.....5	谷 泰.....29
齋藤ドクターとのヤルン・カン	オシメさんのいびき
上田 豊.....7	安仁屋政武.....29
名医 Yさん	今だから話そう。
斎藤 清明.....8	岩坪 吟子.....31
何気ない一言	最期まで見事です、オシメさん
藤田 耕史.....9	斎藤 清明.....31
名医 齋藤 Y先生	酒井オシメさん追悼
前田 司.....10	前田 司.....32
齋藤 Y先輩を偲んで	酒井敏明さん
松浦祥次郎.....11	横山宏太郎.....33
シシャパンマとヤルン・カン	サルトロ・カンリ (7742m) とノシャック
松沢 哲郎.....13	(7492m)35
齋藤惇生先生追悼	事務局だより36
松林 公蔵.....17	会員動向36
齋藤惇生さんを悼む	編集後記36
山本 良三.....20	
チョモランマの Yさん	
横山宏太郎.....22	

追悼 齋藤惇生さん (2025年3月11日逝去)
酒井敏明さん (2024年12月3日逝去)

齋藤惇生さんへ

齋藤惇生 Y さんを悼む

本仁久一郎

最後の交信

昨年11月の或る朝、携帯の着信音が鳴った。齋藤 Y (AACK の古い仲間には、敬称を省略させてもらおう) からだった。言語不明瞭だったが、「入院した。堀デカ(了平)の追悼文がやっと出来上がった」だけが聞き取れた。これが彼との最後の会話だった。

Newsletter への絶筆

彼は AACK の長老として、また登山隊のドクターとして身につけた、専門の外科だけでなく、オールラウンドの経験により、多くの仲間の闘病記やエピソードで、Newsletter の紙面を飾ってきた。1983年の樋口ジャン(明生)に始まり、高村デルファー(泰雄)や平井ポコ(一正)への追悼文。2022年12月に他界した並河ボケ(治)には、23年6月発行の追悼文に、明治10年西南戦争時の祖父並河伍長の事実を記録している。

ボケの没後2か月の23年2月、AACK 第8代会長だった堀(旧姓森井)デカが他界した。Y の旧制第五高等学校(五高)の同級生だったので、追悼集の序文が期待された。ところが、ボケの追悼文は没後半年で発行されたのに、デカのは1年半後にもまだ出来ない。老化の進行とデカショックにより、筆が止まったようだ。昨年秋の電話の後、今年の2月、第110号が漸く発行された。そして3月発行の111号に齋藤惇生の訃報が！デカの追悼文が絶筆となった！

出会の頃

我々は1949年9月に、京都大学新制第1回

生として、旧三高を吸収した吉田分校で、教養課程の講義が始まった。その年の3月、米軍の占領政策により、全国の旧制高校の1年生は学級閉鎖となり、新制大学に移行することが決定されたが、進路となる新制大学の骨子が定まらず、6月に漸く全国一斉の入試が実施され、夏休み明けの9月に新学期がスタートしたのである。

農学部教養課程は200人4クラス。旧制高校1年修了のドイツ語既習者が2クラス、新制高校卒業や旧制専門学校中退の未習者1クラス、未・既習者混合1クラスで、Y は既習クラスに、デカと私(旧制四高出身)は混合クラスに配属された。

開学後のある日、私は旧制中学と四高の同級生を訪ねて、北白川の下宿屋へ行った。そこで友人のクラスメートで、五高出身の Y に出会った。のんびりと大らかな印象だった。

山岳部に入部

Y は五高時代から山岳部に入って、阿蘇の岩場で活躍していた。京大でも山岳部に入り、デカを誘って入部させた。デカは最初の冬休みに、笹ヶ峰の合宿に参加し、藤村オンタイ(良)から山スキーの手ほどきを受けた。その合宿には、旧松江高出身の中島ダンナ(道郎)や六高や旧高知高出身者たちがいたようだ。

冬休みが終わった後、デカから冬山合宿の話が聞かされ、山岳部への気持ちを掻き立てられた。元々中学時代から、郷里の白山や石川県内の山々に親しんでいたから、デカに連れられて山岳部のルームに行き、入部の手続きをすることになった。そこには岡本克己リーダーや杉

山喜一先輩がおられた。

デカは遠見尾根での春山合宿や、5月の富士山登頂に参加し、氷雪のテクニックを身に付けていったが、Yと私は経済的な理由で、参加しなかった。

1950年度

我々が新制2回生になった4月、新制と旧制の1回生が入学し、山岳部に新しい部員が加わった。しかし我々新制2回生は吉田分校、新制1回生は旧陸軍施設跡に開設された宇治分校に入れられ、対面の機会は殆どなかった。

そんな春の土日曜日を利用し、新制農学部2回生Y、デカ、Q（私の代名詞）の3人は旧制2回生（氏名失念、AACK不加入）に連れられ、六甲ロックガーデンへ岩登りの練習に行った。

7月に入って、国鉄福知山線道場駅近くの不動岩で、夏山の予備合宿があり、旧制新制全部員30人近くが集結し、岩登りに取り組んだ。従来京大山岳部と別行動だった三高山岳部員も、初めて行動を共にした。夕食後は旧制1回生と新制2回生の旧制高校出身者が中心になって、旧制高校の寮歌を歌い、大地を蹴って踊り狂うストームが行われ、新制高校出身者が大部分を占める新制1回生の度肝を抜いた。

剣岳真砂沢合宿に参加し剣沢カールに入った時のYの第一声「熊本では冬でもこんな雪見たことなか!」。その日から雪との苦闘が始まった。雪国育ちのダンナやQにとって、グリセードは楽しいものだったが、Yには恐怖の時間だった。しかし夕食後のフリータイムには、Yが披露した七高の「北辰斜に」や北大予科の「都ぞ弥生の」が皆に受け入れられ、蛮声合唱のレパートリーに加えられた。

合宿解散後Y・デカ・Qの3人は、池の平から仙人谷を経て宇奈月に下山、石川県小松市にあるQの両親宅に宿泊。翌日は金沢に行き、Qの四高の同級生で、京大ではYの同級の友人を訪ね、四高跡や兼六園など金沢市内を散策した。

その冬、私は笹ヶ峰の冬山合宿に参加したが、Yは医学部医学科の入試に備え不参加。

3学期に実施された医学科入試には、山岳部からは、Yの他にダンナと兼松ハングロ（雄象）が参加し全員合格をなし遂げた。デカは医学部薬学科に転部した。

1951年度より

医学科学生となったYは、本格的に山岳部活動を開始する。

51年の穂高涸沢合宿後、YとQは3人の新人を連れて、薬師→剣の縦走に挑んだ。Yは冬の笹ヶ峰合宿でスキーに、春の遠見・五龍合宿で氷雪技術に初挑戦し、翌52年末には、北海道知床半島遠征に参加した。

1953年度には、中島ダンナとYが、山岳部現役最上級たる医学科3回生になり、CLダンナと共に、YはSLとして部活動を支えた。そして54年度にはCLになり、部活動を統括した。私は53年春に卒業、会社員になったため、残念ながら山岳部の詳細な活動状況を記憶していない。

1956年～

国家試験に合格しインターンを終えたYは、高山日赤病院の外科医として着任した。同じ頃平井ポコは金沢大学工学部助手として着任した。そして私は富山にあるパルプ会社に勤務していた。3人は時々訪問し合って、自称AACK北陸支部の会合を開いていた。山岳部の仲間や後輩たちも、山の帰りによく顔を出して行った。しかし1957年に私が福島県のパルプ原木集荷部署へ転勤になり、北陸支部は解散した。

翌1958年8月4日、藤平正夫先輩とポコがチョゴリザに初登頂した。

その年の秋、私が故郷小松市で結婚式を挙げたとき、Yとポコが高山と金沢から参列してくれた。

その後2年以内に、Yもポコも共に京都へ帰り、京に新居を構えた。そのころ酒井オシメと岩坪ゴロー（両名昨年他界）がノシャックに初登頂した。

1961年2月、私は経営不振に陥ったパルプ会社を辞し、大阪に転職転住し、Y・デカ・ポコを始め、山岳部の仲間たちとの交流が復活した。

1962年、パキスタンとの合同隊がサルトロ・カンリを目指すことになり、会社の休日には出発準備を手伝い、Yやポコとの交流が深まった。隊は7月24日に、Yと高村デルファー、そしてパキスタンのバシール隊員の3人が登頂に成功した。

中国との縁

時期は明確に記憶していないが、Yは日本医師会の国際交流事業に則り、数年間台湾東岸の都市に滞在し、中国語を身に附けた。これが後年チョモランマ・ナムナニ・梅里雪山・シシャバンマ等の遠征や、中国登山界との交流に大いに役立った。また来日した中国登山協会の人々との交流会には、中国での勤務経験のある私を呼んでくれた。

また彼は一時期日本山岳会会長として、国内外の登山団体との交流・育成に尽力したことも忘れられない。

最後の面会

アルバムを見ていたら、2012年7月のサルトロ・カンリ50周年記念パーティーの写真が

あった。Yもポコも寺本ショーチャン（巖）もデルファーも元気だった。中島ダンナは現在も健在らしい。この後2018年のチョゴリザ60周年には私は体調不良で欠席。2021年のポコの葬式にも体調不良とコロナ予防のため欠席。どうやらサルトロ50周年がYやAACK皆さんとの最後の面会だったようだ。

冒頭でも述べたように、電話やメールによるYとの交流は、昨年11月まで続いたが、遂に跡絶えてしまった。

Yさん、永い間ありがとう！ご冥福をお祈りいたします。遠からず再会の日もあるだろう。その時「武夫原頭」や「北の都」や「紅萌ゆる丘の花」を歌おう。

Auf Wiedersehen! 再見！

「ワイさん」

左右田健次

「降る雪や明治は遠くなりけり」：広く知られた中村草田男の句です。私が山岳部に入った昭和27年もすでに遠くなりました。時のリーダーは藤田シャク、中島ダンナ、齋藤ワイ（惇生）さんと続きましたが、既に昔の昔のこととなりました。このころ、林一彦先輩を筆頭にして、何故か銀閣寺前に山岳部員が大勢住んでおり、山岳部銀閣寺村のような有様でした。清冽な白川の流れが音をたて、小さな橋の東づめには平井ポコが住み、ワイさんは少し西に入った家の2階に下宿し、私は少し下流で林さんのお宅に近い家の離れに住みました。さらに下がると中島ダンナの下宿、そして風呂屋があって毎晩のようにここで何人かが一緒にになり、その後、林さんのお宅に立ち寄って蕎麦やアイスクリームを御馳走になりました。日曜日の朝にはポコやワイさん、時には随分離れたところに住んでいた菊池クメロウが声を掛けてきて大文字山など東山の山々を歩きました。大きな台風が来るというので、数人で京都壊滅の有様を見ようと大文字山に登りましたが、当時の天気予報はいい加減で何事もなく、ガッカリして帰りました。別の台風が来た時のことですが、ワイさんは下宿の物干し台に登り禪をはずしてすっぱ

だかになり、風に吹かれるままに俳句を作りました。それをポコと私の下宿に来て披露してくれました。「台風に裸形（ラギョウ）のマラをさらしけり」。マラは男性のシンボルを示す僧侶の隠語です。私たちより3年上のワイさん、クメロウの年代は禪を付けていましたが、1年下のポコやショウちゃんのクラスになると禪を着用しませんでした。不思議なことです。

何かのきっかけで、ワイさん、ダンナ、私など3、4人が田中に住んでおられた裏千家の老婦人から茶道を習い始めました。時には先生のお供をして茶道具や筵を担いで南禅寺裏や東山の山腹で「野点（のだて）」を楽しみました。後年、ヒマラヤや中国雲南の山に登った折には簡単なお茶道具を持ってお茶を楽しんだのはこの延長になるでしょうか。

ワイさんの数々の山歴については多くの人々が記してくれると思います。梅里雪山峰の遭難事故の折、ワイさんは中心的な役割を果たしてくれました。感謝しても感謝しても尽きぬ思い出です。ワイさんは名うての酒好きでした。私は三河の蔵元の出身であるのに、お酒は少しも飲めない生粋の下戸で、お汁粉党であるのにワイさんやポコ、デルファなどと酒席を共にした

ことは数え切れません。お酒を飲まずして楽しい雰囲気と話に酔ったのでしょう。

ワイさんは若い時に台湾の病院に勤めていましたので、中国語は得意でした。反面、英語は嫌いでした。3、4年前、岩坪五郎さんご夫妻の発意で、ワイさん、五郎さん、吟子さん、オシメさんと共に Huishu さんという中国女性からオンラインで唐時代の詩を勉強する機会がありました。この女性はオックスフォード大学で哲学と音楽原論を研究していました。恐らく今も此処に在籍していると思います。中でもワイさんは別格に優れており准教授格でした。それ

にしても中国語の発音はなぜあんなに難しいのでしょうか。私は劣等生でしたが、杜甫、李白、王維などの詩を楽しむことができたのは、ワイさん、オシメさん、五郎さん、吟子さんの温かい友情のお陰です。私も 92 歳。吟子先生は今もお元気ですが、私が間もなくあの世に行った折にはワイさんを始めとする 3 人の友に「楽しかった」と心からお礼を言いたいと思います。

編注 文中綽名の方々（順不同）：藤田陸奥麿、中島道郎、平井一正、菊池卓郎、寺本巖、酒井敏明、高村泰雄

伝え遅れた感謝のことばをここで

谷 泰

南座の前の齋藤診療所をさいごにお訪ねしたのは、昨年 5 月の半ばであったと記憶します。かつて山で滑落したときの頸椎骨折の後遺症のために、苦しい姿勢に耐えておられたものの、まだ来年の帰国時にお会いできるだろう。こんなたかをくくっていたのが大間違い。あの時が今生のお別れだと知っていたら、忘れもしない山岳部生時代にあなたから受けた貴重な助言で、いかにわたしは多くのものをうるようになったか。そのお礼をしていたのに。こういう悔恨の思いでいま筆を執っております。

わたくしは、齋藤惇生さんとは学部時代の夏・冬山合宿以外、若い時代に国内山行を共にする機会をもちえなかった。そのため学部時代の身近な先輩でありながら、はじめて齋藤さんに親しく山で接したのは、サルトロ・カンリ峰登攀隊の隊員になり、カラコルムのシアチェン氷河で生活を共にしたときでしかなかった気がします。ベースキャンプで小型発電機を回して心電図をとってもらい、「あゝ、大丈夫や」という保証をもらってから以後、一緒に最終キャンプを設営するまで、かなりの日数を一緒に行動した。そして齋藤さん、高村デルファー（泰雄）、パキスタン側隊員のバシール君とを頂上に向けて送り出した日も、上尾庄一郎さんとわたしがしばらく深い雪をラッセルして送り出した。こうしてビヴァークののち登頂成功、重い脚を引きずるようにして降りてくる 3 人を出迎えた。

バシール君はそれこそカラコラム・クラブのメンバーであるとはいえ、アイゼンも初めてはくという全くのビギナー。また高村デルファーは、それまで登山許可取得までのパキスタンでの孤軍奮闘、それに加えてベースキャンプに到着するまで渉外担当としてポーター頭やリエゾンオフィサーとのやり取りの連続で疲労のたまっていた身上。齋藤さんはその中で、ゆったりとした持続力をもって 2 人を牽引し、登攀成功をわたしたちにもたらしてくれた。迎えに出て、互いに抱き合って成功を祝った時、林一彦登攀隊長は涙を流しているのに、満面の喜びをたたえながらもいつもと変わらないあなたの姿を見て、恒常心の人だなと思ったことでした。

それ以後、齋藤さんはシシャパンマ登頂のほか、日本の登山界で重要な役割を果たされた。ただわたしは、京都大学の学士山岳会のその後の活動からやや遠ざからざるをえない事情もあって、晩年の岡山山の山を登る会での同行を除くと、山行を共にすることはなかった。ただ関西在住の AACK 関係の皆さんと同様に、新河端病院をはじめ齋藤診療所でいく度となく健康管理上のお世話になっただけではない。イタリヤからはるばる齋藤先生を頼って、鎖骨を複雑骨折した娘を連れ帰ったときには、立派な整形外科の先生を紹介してくださり、娘はいまはなんの不都合もなかったかのように生活できている。山での滑落以来の身体上の困難にもかかわ

らず、優れた診断力と的確な投薬上の判断を信じて訪れるわれわれのために、きちんと病歴を覚えておいて、じっくりと時間をかけて診てくださる。その齋藤さんのひとりひとりの身上に寄り添う態度に、どれだけ多くの人が癒された思いをして、通い続けたことか。あなたの永遠の旅立ちの報を受けて、みなが感謝の思いと共にその報を悲しんで集まったのも、あたかもお釈迦さんの最後を悲しんで集まった善男善女のように、むべなるかなと思います。

ただ今日はこういうこととは別に、冒頭で触れたように、なおわたしが若き山岳部員時代、悩めるわたしに与えてくださった助言によって、わたしは多くのものをうるようになった。それへのお礼をなせたいのか。おそらく齋藤さんはそんな助言をしたなど記憶しておられないと思うだけに、個人的なことながら少し書かせてもらい、最後のお礼の言葉にしたいと思います。

それはわたしが3回生も終わりのころだったと思います。山岳部では世界の最高峰エヴェレスト登頂以後、果たしてパイオニア的登山というものは存在するかという本多勝一が提起した論争によって、少なからぬメンバーが退部して探検部に移籍するという事件が起こっていた時代でした。ただそんなことは山岳部世界での出来事、当時1950年代の日本を含めた東アジアという地域は、東西冷戦下での緊張の真只中にありました。1950年には朝鮮戦争がはじまり、赤色化の波がついには日本にまで及ぶのかという危惧のもと、政府は左翼政党だけでなく、大学で激しさを増す学生運動を抑圧すべく破壊活動防止法案を提出する。こうして1953年には学生が組織するデモ隊と警官隊とが荒神橋上で衝突、多くの学生が橋下に転落、重傷を負うという事件さえ起こっていました。そしてわたしが属していた京都大学文学部史学科、とりわけわたしの属する研究室の隣りの日本史研究室では、民主主義科学者協会京都支部歴史部会などというものが設置され、マルキシズム的歴史発展段階論に照らし日本はいかなる段階にあるか。いかなる革命路線をもって抵抗せねばならないかなどが、真剣に論じられる時代でした。もちろんわたくしこういう左翼学生の人々とは一定の距離をもっていました。しかし一歴史学徒として、歴史学とはどこまでもわれわれがおかれている現在の立ち位置を知るための過去の

探求であり、現在から無関心ではいられない。そういう意味でも、当時歴史を専攻する学生のひとりとして、この日本の命運が左右されるような切羽詰まった状況下で、＜パイオニアとは何か＞も結構だが、そんなことを議論している状況だろうか。敗戦から10年も経ってない時代、大阪行きの電車に乗ればなお松葉杖をついた傷病兵が、物乞いをして乗ってくる時代でした。高校時代から山登りは好きであったがために山岳部に入り、岩登りの楽しみも、雪山の魅力も味わい始めたものの、こういう時代に山にうつつを抜かしてよいものだろうか。こうしてきわめてプライベートな悩みの末、ある日齋藤さんあなたのもとに出向き、悩みを打ち明けて退部をめぐって助言を求めたのでした。あなたはゆっくりこちらの思いを聞いた後で、「そうか、でも今すぐあれか／これかと堅苦しく考えずに、来れなかったら来れないでよし。辞めずに居てもらってええんやで」と言ってくれたのです。なんとも鷹揚な言葉、それで肩の荷が下りたのでしょうか。わたしは山岳部にとどまり、大学院に残ることになってからは、自ら山行を計画するようにさえたのでした。そして山行ということを通じて、山という自然の豊饒さ、そして怖さを体験すると同時に、仲間と共に山行計画を立て、目標を実現することのもつ意味を知ることになったのです。

あの時山岳部をやめていたら、夏雨型の照葉樹林帯に属する日本の草花の豊かさはもちろん、凡そヒツジやヤギの放牧など実現不可能な条件下にあることを藪漕ぎを通じて実体験することはなかった。西方世界冬雨型の下生えの発達した低い林の中で、馬に乗った蛮族ゲルマンがやすやすとアルプスを越えて地中海地域に進軍できることを実感できることもなかった。いやそれだけではない。沢登りをしながら豪雨で予期しない増水に襲われる。ちょっとした傾斜面の凍結で、思いがけず滑落しかける。山行計画を立てながらも、こういう自然条件の思いがけない変化に直面して、臨機応変の対応を迫られ、組んだ山行仲間と協力しつつ対応し、計画を遂行しなければならない。わたしはこういう経験を通じて、山は、新たに生まれ出るわれわれにとって生を試し、生き、楽しむ場である。山行はともにこのかけがえのない生の試しを仲間と共に経験できる機会だ。こういうことを学び始

めたのでした。

もし山登りが、前人未踏の高みに向けての挑戦という意味でのみ価値をもつのなら、エヴェレストよりも更なる彼方、月へ、火星へという未踏の地へ乗り出すのもひとつではある。しかしそこは生物としてのヒトの住める決定的条件を欠いている。そのために人工的にコントロールされた気密カプセルないし宇宙服の中で生きるほかない。そこは歴史的偉業を達成する場ではあっても、地球上で生きてきた生物的存在としてヒトが生まれ出では自己責任のもとで新たに挑戦をはじめ、魅力に満ち同時に危険をは

らんだ学びの場ではない。いや周囲を見回しても、ラグビー部でも弁論部でも、これだけの豊かな生を学ぶ機会を与えてくれる部はなかったのです。

あの時の齋藤先生のおおらかな助言がなかったら、このような貴重な経験を味わうこともなくわたしはこの唯一の人生を終えることになっただろう。こう思うだけに、遅ればせながらも感謝の思いを伝えるべく筆を執ることにしたのです。やがてそちらにわたしも向かいます。その時にはまたあの世で生きる貴重な助言をくださることを期待しつつ。

齋藤ドクターとのヤルン・カン

上田 豊

齋藤惇生さんと知り合ったのは、1964年のガネッシュ隊でわたしが食料係になったときだ。わたしが京大山岳部に入部した1962年に、齋藤さんはサルトロ・カンリに初登頂したが、隊の食料係でもあった。そのような関係で、親切に食料準備を指導・協力してくれた。食品の寄贈を企業に依頼する文書では、合理的でスッキリした書き方を教わり、のちにも役に立ててきた。

1973年、世界最高の未踏峰だったヤルン・カン(8505m)の登頂をめざすAACK隊に、当時43才だった齋藤さんは、医師として参加した。現地では、漢方薬を活用して隊員たちに歓迎され、心電図などによる高所医学の研究にも取り組んだ。

4月9日、C1でシェルパが高山病になった。通信で夕方BCに、医学部生の高木から緊迫した症状が伝えられる。齋藤ドクターはスッと立ち上がり、ポーカール・フェイスでゆうゆうと、そして素早く準備を整えた。シェルパ2人と夜中、クレバス帯と氷滝の高度差740mのルートを登行。徹夜の治療で、肺炎だったシェルパは救われた。

5月14日、C5(7950m)を出た松田隆雄さんとわたしは午後6時、初登頂を果たした。だがトランシーバーが故障。さらに帰途、ビバークのツェルトが突風に飛ばされ、酸素ボンベも空になった。翌朝、救援を待つという松田さんのもとへ、酸素ボンベのデポを捜して持ってこ

ようとした。だが視力障害や幻覚が生じて彷徨。夢うつつでアイゼンの片方を失う。再び夜を迎え、下らねば死ぬと動いた時、救援の甲斐、森本、ニマ・ノルブが登ってきた。松田さんは、見つからなかった。

徹夜でC5に帰還した私たちは、その日のうちにC3まで下る。テント地の手前で齋藤さんが、「よう戻ってきた！」と飛びつくように抱えてくれた。3日続いた厳しい行動で疲れきっていただけに、うれしかった。すぐに凍傷の治療をしたが、手足の指の変色は戻らなかった。

齋藤さんは八千メートルで苦闘したサーダールのカルマと救援のニマをテントに招き、わたしから謝意を伝える場を設けた。わたしは短い言葉をしぼりだし、2人の手を握った。どんな場合でも、仲間に礼を表わす大切さに気づき、齋藤さんに感謝した。

夕食は齋藤さんが、ありあわせの食材をたくみに生かして、心づくしのすき焼きを作ってくれた。だが、その時のわたしのノドは、醤油がしみて痛み、砂糖さえもノドを刺激した。

それからBCを経てツェラムに救援のヘリが飛来するまでの2週間、齋藤ドクターは凍傷の感染予防と体調管理に、日々ていねいな医療で付き添ってくれた。

昨2024年の暮れ、齋藤さんが入院されていると知った。95歳のご高齢だから、これが最後になるだろうと、12月17日、長岡京の新河

端病院を訪ねた。齋藤さんは、狭い病室の点滴装置が脇に立つベッドで横になっていた。食欲がないのだと言う。

この病院でわたしは、ちょうど50年前の12月中旬、盲腸の切除で入院していた。ヤルン・カンの翌年、ネパールで半年ほど氷河調査した終盤、軽い虫垂炎の症状が出たのだ。エベレスト初登頂のヒラリー氏が現地に建てた病院で、医師が薬をくれた時、これからもフィールドに出るなら、日本で手術しておくと言われていた。齋藤ドクターは手術後、しなびた盲腸をわたしに見せ、やはり取っておいて良かったと言った。だが、昔のことで思い出せないようだった。

面会が終わる頃、齋藤さんが感慨深げに、「よう生きて帰ってきたなあ」と言った。ヤルン・カンC3帰着の場面がよみがえり、「今も、つくづくそう思います」と応じた。お別れの思いで手を差し出すと、意外に大きい手が包んでく

れた。「いつかまた、どこかで」と言って病床を離れた。

もう会えないと思っていても、そう言いたくなる人。齋藤さんは自然でおおらかな、人を元気づけるロマンチストだった。



帰途、ヤルン氷河域にて齋藤ドクター（右）と上田（1973年5月、樋口明生さん撮影）

名医Yさん

齋藤 清明

齋藤惇生さんは16年も先輩なのですが、いつものように「Yさん」と呼ばせてください（同姓のよしみなのか、ときたま電話をいただき、「サイトウです」と名乗られました）。

Yさんは、今西錦司先生の山行にたびたび同行しました。それは、「万一のときに看取ってもらうため」（岩坪ゴローさん）に始まったということです。今西さんは高血圧症なのに降圧剤を嫌ってのもうとせず、どこで倒れるかもしれないといわれながらも登り続けられた陰には、Yさんたちの見守りがあったからといえます。Yさんは多忙でも、今西さんの節目の山行には付き添われ、1000山（1978年、釈迦ヶ岳）や1500山（1985年、白鬚岳）でのフォローが目の前に浮かんできます。

今西さんが亡くなって10年後、白鬚岳での追悼山行でYさんが転落、首の骨を折って半年入院されましたが、「助けてもらったのは同行の仲間のおかげ、単独行なら死んでいた」と、ご本人が語っています。

今西さんがYさんを励ました山行もあります。日本山岳会チョモランマ登山隊に参加する

Yさんを壮行しようと1980年1月20日、京都・北山のカタタキ（ユルメダ、677m）に登りました。酒井オシメ、ゴロー、上尾さんらもさそって、すっかり雪におおわれたヤブ山を快調に登り、「AACKはええルートファインディングする」とご満悦でした（このとき、五万圓「四谷」には山名はなく、ゴローさんと私は近くの民家で尋ねて今西さんに報告しました）。その前年夏にYさんは西堀・日本山岳会長からチョモランマ偵察隊長に指名されたものの、新河端病院長になった直後で、患者さんに迷惑をかけることなどをたいへん気にしていました。そのなかでの、今西さんの激励でした。

また、日本山岳会の京都支部が1983年3月に設立され、Yさんが支部長になったのも今西さんの計らいでした。支部設立の音頭を取った今西さんは、じつは岐阜大学長時代の1971年に岐阜支部を地元の岐阜のほか京都の会員にも呼びかけて設立し、初代支部長をつとめました（1973年には日本山岳会長に就任）。その今西さんがあえて京都支部をつくったのは、「ヒマラヤ遠征隊を出す陰謀団体に育ってほしい」と

いうことでした。その経緯をみていて、Yさんに支部長を経験させて日本山岳会長への布石にするのだと、私はおもったものです（やがてそうになりました）。

もう40年も前の私事ですが、私の勤務先の会社が後援する登山隊にライバル社の社員が加わっているという上司が激怒したとき、Yさんがすぐに対応してくれました。上司に電話し

て、私を病院に呼び寄せ、しばしかくまってくれたのです。

私の妻は、Yさんの病院の近くに住んでいたところはよく診てもらっていましたが、昨夏、それこそ久しぶりに相談にいきました。椅子に沈み込むようにしてじっと聞きとられ、丁寧にアドバイスをいただき、感動しました。

Yさんは、名医でした。

何気ない一言

藤田耕史（1987年京大山岳部入部、ブリヘイ）

正確な日付ははっきりしませんが、AACKルームの、灯油ストーブにかけられたやかんから立ち上る湯気をやたらとはっきり覚えているので、1988年の冬のことだったと思います。当時2回生だった自分は、準備が進められていた梅里雪山とシシヤパンマの遠征になんとか参加させてもらおうと、同期の児玉ビッチ（裕介、梅里雪山隊に参加）と共にルームに足繁く通っていました。その日の会合の議題は、1989年春に派遣されるシシヤパンマの偵察隊のメンバーに私を加えるかどうか、についてでした。その場にいた人はそれほど多くなく、松沢ニーナ（哲郎）隊長、ワイ（齋藤惇生）さんと自分の他、あと3、4人ほどだったと思います。その場の雰囲気は、予算面、高所未経験者の多さから、最年少の私の参加には否定的で、「まあ再来年の本隊には連れて行ってやるから」という感じでした。私自身は抗弁する材料も、アピールポイントも無く、やかんからの湯気を凝視するしかありませんでした。ところが、しばしの沈黙の後、ワイさんが何気なくつぶやくように「何事も経験だから、若いのも連れて行ってやったらええんとちゃうか？」と発言しました。この一言をきっかけに、その場の雰囲気は大きく変わり、晴れて偵察隊に参加できることになりました。その後、チベット動乱の影響でシシヤパンマの偵察はムスターグ・アタへの登山となり、そこで対面した「氷河」に魅了されて以来、ほぼ毎年氷河へ通う研究生活を続けています。

このことを、ワイさんに直接感謝したいと長年思っていたものの、なかなか機会に恵まれませんでした。2008年のチョゴリザ初登頂50周年シンポジウムで講演の機会をいただき、講演の中で上記のエピソードを紹介したのですが、肝心のワイさんが体調不良か何かで参加されていませんでした。その10年後、チョゴリザ初登頂60周年の特別企画「探検大学の誕生」の場にて、ようやく直接ワイさんに感謝を伝えることができました。その時のワイさんの反応は、誰もが想像する通り、「おーそーかね！」でした。

あの会合でのワイさんの何気ない一言が無かったら、私はおそらくムスターグ・アタにはいけなかったでしょう。翌年のシシヤパンマで氷河には出会っていたでしょうが、果たして今のような人生を辿っていたかどうかはわかりません。ワイさんが「後生畏るべし」との深慮と期待を込めてあの一言を発してくれた、とまでは言いませんが、数々の遠征隊へのかかわり方、日本山岳会での様子を仄聞するに、「若者に機会を与える」ことは、ワイさんにとっては息をするように自然なことであったのではないかと思うのです。山屋としてはワイさんのお眼鏡にかなうような活動はできませんでしたが、ヒマラヤを主な対象とするフィールド研究者として、ワイさんと同じように若者に機会を与えていけたら、と思っています。ワイさん、ありがとうございました。

名医 齋藤 Y 先生

前田 司

1 回生冬の笹ヶ峰合宿で小生は同期の稲田とともに食料係となった。しかし何を間違ったのかえらい金が足りない。野菜を買うだけの金が捻出できなくなった。そこで京都の中央市場の野菜売り場へ行けば余ったものや、傷物がたくさん捨ててあるのを、小学校の社会見学で見たのを思い出し、2人で野菜市場へ拾いに行った。確かに野菜は山のように放かしてあり、好きなように持って行っていいよと言ってもらったが、年末の野菜は白菜ばかり。食料係として求める玉ねぎもじゃがいももゴミの山をかき分けたが出てこない。あきらめて傷の入った白菜を10数個もらって帰った。入山の時はみんなのザックに3、4個入っていた。

さて最終日の反省会。同行いただいたOBのなかの齋藤 Y (惇生) さんから冬山にこんな効率の悪い野菜を持ってくるなど大目玉を喰らったのが齋藤 Y さんとのお付き合いの始まり。その後、医療係の時各パーティが持参する救急薬をパックにして常備したが、山での応急手当の方法と用意すべき薬の指導を齋藤 Y さんにしていただいた。

卒業してからは山で一緒にさせていただいたのは、日本山岳会京都支部でのペルーアンデス・ワスカラン周遊トレッキングと北摂の三角点山行ぐらい。

しかし小生の主治医としての齋藤先生（ここからは「先生」と呼ばせていただく）は大きな存在となる。先生の診療所が京都市内の四条にあり、小生の店に近く診療所の開設の頃から家内ともどもお世話になっていた。当然のことながらここには AACK の先輩連中も齋藤先生に診てもらいにこられる。時にはすでに開店休業になっていた木曜会にかわる楽しい団樂の場になった。先生の診察は患者一人ずつ容態の話を聞いて対処されるし、待合室に何人待っているのが急ぐことなく診察されるので、待ち時間は長くなるが誰も文句は言わない。自分の番になれば診察ついでに先生と山の話もするのでお互い様だ。

小生の長男が小学生の時、虫垂炎で近所の病

院で手術を受けたが術後の処置が適切でなく、高熱と腹痛が続いた。そこで齋藤 Y 先生に相談すると、聴診器をポケットに忍ばせて親戚のおじさんの見舞いを装って来院いただいた。そーっと診察のあと齋藤先生の病院に転院するように手配いただき事なきを得た。小生も還暦も過ぎると月一回の検診が慣行となった。平成24年秋、先生が吉野の白鬚岳で大怪我をされたときは先生の容態はもちろんであるが、自分の診療はどうなるのかの心配も大きかった。幸いお元気になられ再びいつも通りの診療が再開された。毎月の検診で血液検査をしていただくが、結果が出ると必ず電話で知らせていただく。特に血糖値の数値が上昇したときには細かい指導があった。いつもの検診のなかで、脊柱管狭窄症や大腸のポリープなど疑いが見つかったと、すぐに診療所から電話一本で然るべき病院へ検査や処置の指示を出していただき、おかげでどれも速やかに回復した。先生の最晩年、毎月の検診で小生に不整脈が見られ、この時もすぐに心臓疾患に評判のいい京都三菱病院を紹介いただき、カテーテル・アブレーションの手術を受けることとなった。手術は成功裡に終わり無事退院。ところが帰宅したその晩から首から下の全身に強烈な湿疹と高熱が出た。翌日手術を受けた病院で診察していただいたが、この病院では応急処置のみであったので、齋藤先生に診ていただくことにした。先生は退院時に処方され、服用した胃薬について克明に調べられ、何%の低い割合で副作用が出ることを見つけられた。合わせて小生のびっくりするようなひどい湿疹を見られて「こんなひどい症状は今まで見たこともない。いい勉強をさせてもらった」と実に謙虚におっしゃられたことに、畏敬の念をもって先生を仰ぎ見た次第である。

先に亡くなられた岩坪五郎さんが、「自分の末期に齋藤先生からなら引導を渡されても納得して旅立てる」と言っておられたが、これぞまさしく名医への絶大なる信頼の言葉である。

合掌

齋藤 Y 先輩を偲んで

松浦祥次郎（コッテ）

齋藤惇生先輩にお会い出来た最後は、岩坪ゴローさんの昨春の告別式でした。お話ぶりは想像していた以上に確りして居られたのですが、肩をお貸してタクシーにお乗り頂く際には、お足元が多少確かでなかったので、「やはり、お年を召されてか」と、少し気懸かりを覚えました。AACK の先輩方や、同期近い仲間が次々と急ぐように旅立って行く、この数年来の寂しさが一段と身に沁みます。

ここからは、山岳部入部以来呼び慣れた「Y さん」との語りかけで、ご教示頂いたり、お世話頂いたり、ご面倒をお掛けした長年の事々を偲びつつ、心底からの深謝と尊敬の念を書き進めさせて頂きます。とは言え、「Y さん」との呼び名の所以が「Y 談好きの Y」だと聞かされて以来、後輩がそのように呼びかけるのは何とも気が引ける事でした。ともあれ「郷に入っては郷に従え」の諺に習い、長年の間にそれが普通になりました。そのくせ、本心では「Y さんの凄い Y 談と言うのはどんなのだろう」と興味津々で待ち焦がれましたが、遂にその夢は叶いませんでした。数十年の間に 1 度も同じテントに同宿する機会に恵まれなかった不幸のためでしょう。ともあれ、京大山岳部 (KUAC) 部員間で呼び合うあだ名の「口を憚りたい酷さ」は他の類例を許さない事でしょう。これは KUAC 文化です。幸か不幸か、私は「コッテ」というあだ名を付けられました。これは重い荷車を漕（よだれ）垂らしながら曳く「こといのうし（特牛：重荷を負う牡牛）」のことと広辞苑に在ります。言わば「特に重い物はコッテが持ちよる」とばかりの有難い、名誉なあだ名でした。そして、実際に有難いことに、1 回生の春山大計画（毛勝岳・猫又山を経て、剣岳往復）の最終日、撤収の時に第 1 回目重量挑戦を課せられました。脇坂ザッカスリーダーの命令で 8 人用ポーラーテントを担ぐ事になりました。このテントは、ずっと昔、大先輩達が白頭山遠征時に使用されたとの伝説的大テントでした。大きくて頑丈、快適ながら雪山で使用の直後、干

す間も無く、たたむのも難儀な代物は分割もできず、凄い塊として背負い込む他ありません。とにかく、あだ名に恥じる事無く必死に担ぎ下ろしました。

この山行で、Y さんは最終登頂メンバー 2 人（酒井オシメさん、高谷ハチ公さん）を支援して登頂用テントに留まり、登頂メンバーが成功からの帰路、雪崩に巻き込まれながらも、奇跡的に助かり、テントに 2 人を収容されたときに「大泣きに泣かれた」との報告に接し、登頂用ベースキャンプに居た私達も涙しました。Y さんのお心根に接した感激を思い起こします。

この山行前年の夏山合宿（剣岳真砂沢キャンプ）では初めて Y さんから直接にご指導を受け、また大変お世話になりました。合宿明けでは全員が幾つかのグループに分かれて、それぞれの山行を継続することになっていました。私は Y さんがリーダーをされる南ア連峰縦走計画に参加させて貰うのを希望しました。Y グループの行動予定はかなり特異でした。他のグループは全て連続的に北アルプス内の何処かの方向に目的を定めて計画を立てていました。Y グループだけは一旦下山し、南ア連峰縦走への拠点に移動し、気分を入れ替えて挑戦するとの雰囲気でした。その拠点というのは、同期入部部員本多勝一君の伊那谷大島の自宅でした。

Y グループの真砂沢キャンプサイトからの下山が、まるでチャレンジ始めそのものでした。真砂沢少し下流の徒渉適地と判断できる場所でも、深さは腰近く、水流はかなりのもので、徒渉安全確保のためのフィックスロープをセットするのが大作業でした。徒渉は当然慎重の上にも慎重な行動でチャレンジを無事に突破できました。（2007 年版「山と高原地図 36」昭文社では、この地点と思われる場所に夏期のみ丸木橋設置とあります。時代の変化を知らされます。）

徒渉後の「内蔵助平」を目指し、それを通り抜け、通常 of 山道に到るまでの行程は、踏み跡も確かでない藪漕ぎ同様の有様でした。それだけに大変自由な自然溢れる山歩きに恵まれた感じで、「アルプス山中にも、未だこれほど人跡

未踏を感じさせる自由一杯の桃源郷があるのだ」と静かな歓喜を満喫しました。しかも、このルートの途上で仰ぐ剣岳の勇姿は正に最高のものと心に刻みました。Yさんのお蔭で北アルプス景観の真髄を見せて頂いた記憶が蘇ります。

南ア連峰縦走の拠点・本多勝一君宅に到着した時に、思いもよらない緊急電報が私の自宅から届いていました。「ソフ キトク スグカエレ」が電文でした。私が「どうしたものか」と逡巡しているのを見て、Y先輩は「何を迷っている。こんな報せを受けて迷う奴があるか。さっさと荷物を纏めて大特急で帰り、お祖父さんの枕元に行け」と尻を引っ叩いてくれました。はっと迷いが冷め、南ア連峰縦走用に送り、預けてあった2週間分の自分の食料をキスリングに詰め込み、本多君の自宅を後にしました。この時のキスリングの重かった記憶が思い起こされます。この素早い行動のお蔭で祖父の臨終には間に合い、間違っていれば、一生の悔いが生じたであろう不幸を犯さずに済みました。Y先輩の激しい叱咤のご恩に改めて深謝を捧げます。

この祖父は琵琶湖南部の東岸（現在は草津市志那町）に石垣を積んで宅地を造成し居を構えていた母方の祖父（藤田亀吉）で、太平洋戦争末期の学童疎開令で京都父母の元を離れ国民学校3年生末期に祖父の元に疎開し、その夏に終戦を迎えた後も、祖父の家での生活が気に入り、地元の常盤小学校（母の母校）を卒業するまでここで育てて貰いました。この祖父の経歴は全く知りませんが、並の田舎の爺さんではない、奇妙な先見性を持っていて、観天望気というか、天候の変化は、NHKの天気予報より遙かによく的中しました。私も祖父の見方を教わりましたが、それは後の山歩きにも相当に役立ちました。

今も思い出しては不思議に思えるのは、ある日空を見上げながら、米軍機が上空を横切っていくのを見て、「敵の飛行機が悠々と飛んでいるのに、日本の飛行機は一機も見えない。琵琶湖の向こう岸には、海軍航空隊がいるのに。これでこの戦争に勝てるのか」と敗戦を予想するような言葉を口にしたのを聴いたことです。そして、本当に間もなく「ポツダム宣言受諾」の玉音放送となりました。今にして思うと、祖父は世界の動きも観天望気と同じように見ていた

のでしょうか。このような祖父の性格や物の見方を、私も何となく知らない間に仕込まれた気が致します。とにかく、Y先輩のお蔭で、祖父の記憶が確り心に残りました。

Y先輩、最大の感謝を捧げなくてはならないのは、私が60年以上もの長期に亘って、決して易しくない原子力関連の仕事に健康状態を維持して集中出来たのは、専らY先輩による私の心身へのお手当とご教授のお蔭に拠ることで

す。私の勤め先は茨城県東海村と東京だけでしたから、Y先輩に主治医をお願いする事は不可能でした。しかし、自分で「これは変だ」と感じた時は、無理をしてでも新河端病院にお邪魔し、或いは厚かましく直接に電話でご教示をお願いして適切に治療、ご教示を頂きました。それらを真面目に、また時には必死に守ることで大過無く過ごすことが出来ました。

顧みますと、第一の重要なご教示は中年で椎間板ヘルニアになりかけたとき、これは多くの登山愛好者が罹患する故障ですので、多くの実例を近くで観ており、最初の痛みを感じた時、早めに新河端病院でご診察頂き、ご処置を仰ぎました。幸いに症状は極めて初期で、ご診断は「傾向が見えるが、まだ椎間板ヘルニアには到っていない。従って、いまから予防対策を確実に実施すれば、十分に免れる可能性が高い」と言うことでした。その時、「ウイリアムズの体操」を教えて頂き、また痛みを緩和・抑制する特効薬として「三鞭丸」を指示頂き、さらに足腰を適切に強化訓練する運動を推奨して頂きました。

私はこのご指示をかなり忠実に次のように実行しました。

- ① 通勤は可能な限り歩行を旨とし、毎日、60分以上の歩行を目標にする。
- ② 通勤と散歩の歩行には重い登山靴(両足計、1.3～1.5kg)を利用する。
- ③ 役職に伴う送迎車は可能な限り断る。断るのが後継者の迷惑を生じる場合は出勤時から退勤時のどちらかに限定する。

第二の重要なご教示は、ほぼ50歳を超し国際会議の海外出張がやたらに増加した頃、AACK総会後の懇親会でお目にかかるや否や、直ちに「コッテ、ひどく太ったな。注意しない

と健康を壊すぞ」と厳しいご忠告を頂いた事です。「はっ」と驚いて直ぐに減量対策に取り組みました。この頃、東京の専門医から「高尿酸血症（痛風）」の診断も受けていましたし、原研入所時72kgだった体重が80kgになっていましたので、今が減量開始の時と決心し、「10年計画で72kgへ減量」を目標に日々の飲食と行動を律する生活に入りました。特別の計画や予定表は無く、飲食その時、その時を決断と行動時として、「飲食の是非」を決断する一種の「現場主義」です。これで「食」は食べ、「飲」は飲み、節制しながらもそれなりに楽しみ、心懸けは緩めず過ごしましたら、10年を待たずに目標の72kgを過ぎました。その後も、このスタイルを続け、この3年ほど以前から平均体重が61～62kgに落ち着きました。この間、毎朝身体測定値（体重、体温、血圧、脈拍、血中酸素濃度、自覚気分等）を記録しましたが、幸いに極めて安定に推移して来ました。また発症時は厳しかった高尿酸血症（痛風）も数年前に1992年来お世話になっている主治医（ご誕生日が私の7日前）から「全快」を宣告され、今や、治療や健康維持のため適時飲んでる薬品類はたまに飲むビタミン剤と、漢方薬の「透頂香いろいろ（外郎藤右衛門）」だけです。勿論、常備薬や山行に必要な準備薬は用意しております。

このような経緯で、最後の勤務となった某公益財団法人理事長職を去る6月末に任期満了で退職する事が出来ました。ひとえに、Y先輩のお蔭とお礼申し上げるほかに言葉がありません。どの様に感謝の心をお伝えすべきであったか、今では遅すぎますが、唯一少し心が軽くなりま

すのは、一昨年（令和5年）1月末にAACK先輩連お馴染みの祇園近江作で、Y先輩をご正客として、井上流の京舞を楽しんで頂く一夕の家族的宴席にお招きし、お気持ち良くお過ごし頂いたことです。これは全く奇貨の出来事だったのですが、これもY先輩のお蔭で実現出来た事でした。私共夫婦の娘の夫（娘婿）の職業は宝生流能楽のシテ方能楽師（重要無形文化財保持者）です。その彼が「日本舞踊の原型は能の舞に由来すると言われている。その典型的日本舞踊の井上流京舞をぜひ身近に観たい」との強い希望があると聞きました。それなら祇園の然るべきお茶屋さんと、一応の舞手さんの舞を鑑賞させて貰うのが最適と考えました。いろいろ思案した挙げ句、矢張りY先輩に近江作への繋ぎをお願いし、Y先輩をご正客にした会席を設け、然るべき舞手さんを近江作さんに段取りして貰うのが良いと考え、Y先輩をお願いしました。幸運にも、近江作の女将さんがY先輩診療所の患者さんであり、お蔭で話はトントン拍子で纏まり、上記の宴席を実現出来ました。女将さんのご尽力で、舞手さんには、祇園で名のある舞手さんをお選び頂きました。Y先輩には大いにお楽しみ頂けた様子でしたし、当方の宝生流能楽シテ方も十分参考になった事でした。後日、女将さんからのお手紙には「いつもより一層緊張いたしたお座敷でございました。」と記されておりました。この宴で、Y先輩とのご厚誼も再開出来たと喜んで居りましたが、ご寿命は如何とも成し難く、ご冥福をお祈りいたします。合掌

2025年7月末日記

シシャパンマとヤルン・カン

松沢哲郎（1969年入部）

齋藤惇生ワイさんと2度の遠征をご一緒した。1973年ヤルン・カンと、1990年シシャパンマである。ワイさんは1949年入部で、私は1969年で、ちょうど20年の開きがある。

2月24日にワイさんをお見舞いした。ちょうど娘さんの宮城かんりさんと夫君が来ておられた。30分間ほどお話しできた。それまでの

見舞いと同様に、その時もシシャパンマの話が出て、「楽しかったなあ」と言ってくれた。枕元にはシシャパンマの写真が飾られていた。

会話の冒頭はいつも病状の報告で、この時は「肝臓と腎臓が悪くなっている」という。それに続くやりとりで、「カンノ」、「コース」と聞き取れるが意味が分からない。黄疸が出てい

た。肝臓の機能障害に酵素が関係するのかしら？ 語られた言葉の断片をつなげると、「カンノ、コーソー、イノチ、スナワチテンニアリ、ジタバタスルナ、ニネンマエニ、ツイトウニカイタ」と聞き取れた。

帰宅して AACK ニュースレターをみたら、2年前に並河治ボケさんの追悼をワイさんが書いていた(注1)。ボケさんは治療を勧められたが拒否、そして食事をとらなくなり、息をひきとったという。ワイさんの文章は、『伝えられている漢の高祖の最期を思い出した。高祖劉邦は楚の項羽と戦い続け、最後垓下の戦いに勝利して漢王朝を樹立した。彼の最後の病状が悪化した時、臣下が「いかがいたしましょう」と問うた。漢代には疾患治療に草根木皮を個別に使うだけでなく、各々の薬効を基に合剤が体系化されていた。現在でも東洋医学の基礎となっている「傷寒論」は漢代に発刊されている。しかし高祖は手を振って「命はすなわち天にあり」と云って更に手をつくすことを拒否して死に赴いたと云われている』という記述だった。司馬遷の『史記』による高祖の逸話だ。「命すなわち天にあり」、続けて「ジタバタスルナ」と言った。心境を伝えたかったのだろう。「キョウハキテクレテアリガトウ」と明瞭に言って、右手を差し出して握手を求められた。程なくして3月11日に訃報が届いた。

京大山岳部『報告16号』は1969年から1974年度の6年間の山行記録325件である。1回生夏の剣岳岩登り合宿は、前後期合わせて43名の山岳部員がいた。矢吹和之さんがリーダーだった。東大入試のなかった年で、大学は封鎖され授業がなかった。2回生、3回生と、毎年100日以上の中を行をして、4回生の1972年8月後半山が終わった直後に AACK で動きがあった。ヤルン・カンの登山許可が出そうだ。1967年にルート偵察をした樋口明生ジャンさんと松田隆雄ランプさんが隊の牽引役だった。山岳部の現役にも声がかかり、リーダーの高木真一ゼンカとサブリーダーの私が参加した。ワイさんは隊の医師として参加が決まった。親しい付き合いは半世紀前のヤルン・カンへの準備に遡る。AACK 遠征隊には最年少隊員が食料係をするという慣例があった。ワイさんは、食べ物造詣が深く、あれこれ教えてくれた。通常の食材とは別に、特別に用意するよう指示さ

れたのが、からすみ、大豆と納豆菌、えびすめ(昆布の佃煮)、一保堂の抹茶、夜の梅という虎屋の羊羹だった。遠征荷物の過半は高所食料を詰めたカートンボックスである。甲斐邦男、森本陸世グロン、高木という歴代のリーダーだった人たちが隊の最若手で、彼らと一緒にカートンボックスに食料を詰めた。食料はすべて味の素などの会社からの募品で手に入れた。節約して塩を購入せず全部アジシオにした。塩は無いのかと、ワイさんはじめ隊員諸氏からお叱りをいただいた。

西堀榮三郎隊長、樋口明生登攀隊長、齋藤惇生、田附重夫ガイガー、富田幸次郎、吉野熙道コッペ、松田隆雄ランプ、神山義明、上田豊ポッポ、浅野潔パンネ、井上治郎ジロー、甲斐邦男、森本陸世グロン、高木真一、松沢哲郎ニーナ、隊員15名全員が一堂に顔をそろえたのはタプレジョンで、そのときだけだった(写真1)。ヤルン・カンのワイさんは当時まだ43歳だったので、登ろうと思えば登れる体力はあったはずだ。しかし70歳の西堀さんもおられたし、隊員やシェルパたちの健康を管理する医師としての役割を優先したように見えた。吉野さんと私で第2キャンプから第3キャンプへの急な雪壁のルート工作をして梯子をかけた。無事に任務を果たしてBCに戻ると、顔がパンパンに腫れている。ワイさんが処方したラシックスを飲むと大量の尿が出た。毎回の尿量を測って登山手帳に記すのが隊員の日課だが、1日で8.6ℓの尿が出た。これは最高記録だということでワイさんにとても喜ばれた。高度順化に失敗したので、体調は戻っても再び最前線に出してはもらえなかった。荷上げを繰り返していた登攀



写真1 ヤルン・カンの全隊員、ワイさんは後列左から3人目(提供:森本陸世)

の後期に、ワイさんがC4 (7450m) まで登ってきてお会いしたと記憶している。そこからは頂上までのルートの全容を見ることができる。

松田さんと上田さんが5月14日に8505mの初登頂に成功した。とはいえ帰路にルートを見失い、15日、松田さんが還ってこれなかった。ヤルン氷河のコーナー台地にケルンを積んでお別れをした。氷河のモレーンを下っていくと、緑の草が萌え、空気が濃く感じられる。首都カトマンズに戻ると、山岳部の現役2人は当初の予定通り、次の遠征に向けた山の偵察をしてから帰国せよという上層部からのお達しがあった。フンザ・カラコルムの偵察をあらかじめ計画していた。パキスタンに詳しいワイさんがウルドゥー語の手ほどきをしてくれた。フンザ一帯の偵察をして、未踏峰シスパーレを見つけて東稜を試登し、次の遠征の目標にして帰国した(注2)。その直前に北又谷の遭難があった。

1973年8月の北又谷、11月の槍ヶ岳中の沢の2つの遭難があり、翌74年9月にK12で初登頂後の遭難があった。わずか1年ほどの間に山岳部では3つの遭難で合計8名の岳友が亡くなった。K12で亡くなった高木は医学部生だった。ワイさんにとっては後事を託す人材を失って、落胆は大きかっただろう。

高木の1年下の回生に、瀬戸嗣郎ワンヤ、松林公蔵マーポー、出水明カラスマと3人の医師がいた。その1年下に平田和男ヤキハマがいた。この4人の医師が中核になって京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊が結成された。シシャパンマ(8027m)を巨大な低酸素室に見立て(写真2)、ニホンザルも連れて行って、人体の低酸素適応の機構を調べた。登山医学研究のパイオニ

アであるワイさんと中島道郎ダンナさんをお誘いし快諾を得た。総隊長には医学部の戸部隆吉教授が就任してくださった。医師の林一彦さんとAACK会長で医学部教授(薬学)の堀了平さんが特別顧問として隊に参加してくれた。毎日新聞と毎日放送が後援してしてくれて、記者の榊原雅晴ルンペ、坂井克行ウタマロ、帰国後に入社した富永浩三ババチョさんがいた。日中合同隊で日本人32名に及ぶ年齢や背景の違うメンバーをまとめたのは、河合明宣バイク事務局長の人徳だ。河合さんは、高木やわたしと同回生で、京都にいて熱帯農学の助手をしていた。主要メンバー全員が京都にいないという隊を、縁の下の力持ちとして支えてくれた。



写真3 登頂を終えてC4で(提供:榊原雅晴)



写真2 シシャパンマ(提供:富永浩三)



写真4 登頂の祝福ケーキをC1で食べる(提供:富永浩三)

シシャパンマは、高所医学研究とともに、登る意思のある人は全員登頂を目指した隊なので、日本人15人を含む22人が登頂した。とりわけ隊員全員が等しく大喜びしたのは、5月21日に60歳のワイさんともうすぐ60歳になるダンナさんの2人が還暦登頂した時だ（写真3）。ご本人たちもこれが「ヒマラヤ銀の時代」の幕明けになることを自覚していた（注3）。

ワイさんは京大や日本山岳会の多くの遠征隊に参加している。エベレスト（チョモランマ）もナムナニもナムチェバルワも梅里雪山もある。たくさんの岳友がお見舞いにかけていた。思いついて、「どの山が一番印象に残っていますか？」とたずねたら、「シシャパンマ」だと言う。これは、私に気を遣ってうまく合わせてくれているのだと思った。重い病の床でもそうした配慮ができる方である。でも、次に尋ねたときも同じ答えだった。愛娘にかんりと名付けたし、初登頂者だし、きっと「サルトロ・カンリ」と答えると思っていた。なぜシシャパンマなのか？ 思い当たるのは、多くの遠征隊に参加したとはいえ医師や隊長という重い役目がある。シシャパンマはそれが無かった。自分が登頂することだけが登山の目的だった。登頂への固い決意をもって臨み、そのためにトレーニングも積んだ。純粋に山登りだけを楽しみ、頂上に立った達成感があり、かつ喜びを皆と分



写真5 先頭で歩く（提供：榊原雅晴）

ち合えた（写真5）。

ワイさんは常に飄々とした温顔の人だった。優しく、誰に接するときも分け隔てが無い。思いついても自然に頬が緩む。本務の新河端病院の院長を務めるかたわら、四条南座前のビルの1室で夜診のための診療所を長い間にわたって開いていた。隣のビルにキエフというウクライナ料理の店がある。窓辺の席がお気に入り、鴨川の向こうに愛宕山が見える。よく気にかけてくださって食事を共にした（写真6）。

ワイさんの訃報に続いて翌々日の3月13日にバイクさんの訃報が届いた。バイクさんも温和で人懐っこい笑顔の人だった。お二人とも、その表情や声音を思い出すだけで心が和む。思い返すと、「ありがとうございます」という感謝の言葉しか思い浮かばない。願わくは天に在って、残されたご家族とわれわれ友人を見守り続けていただきたい。ご冥福をお祈りします。

注1) 齋藤惇生（2023）並河ネボケさんを偲ぶ。

AACK ニューズレター、2023年6月号、3-6。

注2) 松沢哲郎・高木真一（1973）解禁後のフンザに入る。『岩と雪』、34号、18-27。

注3) 齋藤惇生・中島道郎（1991）「ヒマラヤ銀の時代：60歳の8000メートル峰登頂記」、『ヒマラヤ学誌』第2号、43-48。



写真6 キエフのワイさん93歳2023年4月23日（提供：松沢哲郎）

齋藤惇生先生追悼

松林公蔵

聖山カイラス巡礼

うず高く積まれた石のはざまに、タルチョとよばれるチベット特有の布地がいく久しい年月の風にさらされた小高い丘の上、ここは聖山カイラスの山ふところ、標高 5800 メートル、小さな雪田から流れ出るせせらぎのかたわらに私たちは幕営していた。

カイラス山は、ヒンズー教ではシバ神の、チベット仏教では釈迦牟尼の化身と崇められている聖地。いくたの地から長い長い道のりを越えてここまでやってきた巡礼者たちが黙々と聖山カイラスの周りを経巡っている。チベット系、インド系、それぞれの民族衣装も長途の旅のほこりにまみれて、孫にささえられた祖父母は 60 歳を超えていようか、つえをつきながらも家族とともに、それがあたかも人生の目的でもあるかのように巡行している。

何も音楽は街の管弦楽ばかりとは限らない。人里はなれた氷河の流れにも清らかな音楽があり、微風は静かなしかし悠久のペーソスあふれる曲をかなでる。

おのおの異なった歴史と文化をもってここを経巡る老人たちは、いったいどのような一生を送ってきたのであろうか？

久しく家郷を離れ、さまざまの想いとらわれる瞳をあらって、私はひたすら夕陽を注視する。足下にはチベットの砂漠が限りなく広がり、白くかがやくヒマラヤとは対照的に、マナサロワールの湖面は蒼く映えている。遠く西のかなたに、やがて暮れなずむ夕陽が下向き、永劫回帰のひとつまながら一瞬無限の美しさを呈して没してゆく太陽を眺める。だが、それが限りなく美しいのは、迫りくる黄昏れのゆえかもしれない。

人の命は百年にも満たないのに、人の想いは悠久の時空をかけめぐることができる。

遠く古代より、シナとインドの間のどこかに宇宙の中心となる聖なる山があって、その山より流れ出た一本の川は、ひとつの湖に入りそこで分かれてアジアの四つの大河（インダス、サトレジ、ガンジス、ブラマプトラ）になるという。

大河はいずれも、屏風のようにそそり立つヒマラヤの大障壁をくぐりぬけて海にそそぐ。大河の源をなす聖なる山は、ヒンズー教徒や仏教徒、そしてジャイナ教徒から神々の座として崇められてきた。

湖面標高 4 千メートルのマナサロワール湖をなかにはさんで、カイラス山（写真 1）と対峙するかたちでナムナニ峰（7694m）が聳えている。インド名グルラ・マンダータ、その秀麗な山容は、おそらく過去数百年のあいだ、歴史に名をとどめぬおびただしい数の巡礼者たちの目を憩めたことであろう（写真 2）。20 世紀になって、この付近に分け入った探検家たちは競ってその存在を記録に残している。

遠く北京から、新疆ウイグル自治区、タクラマカン砂漠を越え、シルクロードの最果ての街カシュガルに達し、さらにまた南下すること千キロ、崑崙山脈、アクサイチン高原を経てようやくこの聖域に私たちは入った。遠い僻地に巡礼する異郷の老若男女の姿とともに、私たちはここまで旅してきた。そして、久しく人間を拒み続けてきたナムナニ峰の頂きに、私は、人類として初めて足跡を残す幸運にも恵まれた。僧河口慧海が、日本人として初めてナムナニ峰を仰ぎみてから 85 年後に、私たち日中合同ナムナニ峰遠征隊が初登頂を果たした日、1985 年 5 月 26 日のことである。

日中友好納木那尼（ナムナニ）峰合同登山隊

ナムナニ峰は、グルラ・マンダータとして知られ、多くの岳人の垂涎のまどであった。チベット高原南西端、世界の屋根の最奥に位置するナムナニ峰は、20 世紀初頭に 2 組の外国人が挑戦、敗退している。京都では、AACK と同志社大学山岳会がナムナニに登山を申請していた。許可を出す中国登山協会では、同志社と京大を選別することが困難との判断で、最終的に、中国登山協会・同志社大学・京大の合同で、中国登山協会の会長・史占春が総隊長、京大の齋藤惇生が副総隊長、同志社の平林克敏氏が登攀隊長として、登山が行われることになった。3 隊の



カイラス山



ナムナニ峰

合同であるので、登頂隊員の決定に関しては、平林登攀隊長はご苦労されたものと思われる。

第1次アタック隊は、中国登山協会4名、同志社2名、京大2名の構成で、無事初登頂に成功した。第2次隊が最終キャンプに宿泊し、出発の朝、1名の隊員が、体調を崩したという連絡が、ベースキャンプに届いた。第1次隊として、登頂を終えてベースキャンプに帰っていた私は、早朝のトランシーバー交信に目覚めて、テントをでて、第2次アタック隊員の不調を知った。史占春総隊長は、中国の第2次隊員たちにむけて、「あなたがたは共産党員です。私は、あなた方に党の品性を発揮することを求めたい。中日両国人民の友誼のために、みなを組織して病人を安全におろさなければなりません。中国隊員、日本隊員、皆にはっきりと話してください。登頂することも救出することも、ともに貢献することです。私は、救出に力を尽くすことは、登頂に匹敵する、そう位置づけています。もしも今、違った個人の感情から出発して考える者がいるとしたらそれはまったくの誤りです。勝利は全体の勝利であり、だれか個人の勝利ではありません。大局をみて、まずあなたがたがしっかりしてください」。

齋藤Yさんは、私を呼び、「君は医師だから、ただちに救出に向かいなさい」と命じられた。前日に第1次登頂を終えてベースキャンプにもどっていた私と同志社の吹田がただちに、上部に向かい、第1キャンプをこえて第2キャンプのまえで、寝袋にくるまれザイルで引かれた高山病隊員と出会い、ただちに診察した。肺に雑音は聞かれたが、意識は回復傾向で、少なく

とも、もう500メートル下ろせば救命可能と私は判断した。第2次登頂を諦めて高山病隊員を下降させた2名の日本人隊員と2名の中国側隊員が診察する私のまわりを囲んでいた。その日は、第1キャンプに1泊して、翌日ベースキャンプに戻った際、齋藤Y先生は、両眼から流れる涙をぬぐおうともせず嗚咽していた。

ヒマラヤ医学学術登山隊（1990年）

ヒマラヤ医学登山隊メンバーは、それぞれ医学研究者、心理学者、社会学者と、専門領域は異なったが、京大式の山登りを通して、自然を愛し、未知の領域とフィールドを重視する、今西錦司流の「生態学」的な精神を濃厚にうけついでいた。

少数の登山家の事例と、ごく限られた高所における人間の最大酸素摂取率に関する観測から、1964年に米国生理学会は、あくまで計算上ではあるが「エベレスト頂上（8848m）では、人間は酸素無しでは静かに横たわることのみが可能である」との実験結果を発表した

「人類が無酸素でエベレストに登頂することが果たして可能か？」という、戦前からいく度も繰り返し論争されてきた探検的命題について医学上の結論が下されたのである。すなわち、人は無酸素でエベレスト頂上に達することは生理学的に不可能である、と。

しかしながら1978年、ラインホルト・メスナーとピーター・ハーベラーは、米国生理学会の名で不可能とした結論をくつがえして、無酸素でエベレスト頂上に達してしまった。

このメスナーたちによるエベレスト無酸素

登頂に驚いた米国生理学会は、この事実の生理学的うらづけを実証するために、1981年 American Medical Research Expedition to Everest (AMREE) というエベレスト医学登山隊を組織し、6300 mのキャンプで行った低圧下運動負荷試験の結果、やはり計算上ではあるが、無酸素でのエベレスト登頂の生理学的可能性を算出した。

すなわち、人類によるエベレスト無酸素登頂の可能性という生理学上の特定の問題を解決するために、AMREE という医学探検隊が組織され、自らの学説の問題点を身を挺して実験に移したのである。

高所生理学実験で得られた多くの知見にもかかわらず、人間の低酸素に対する生理学的順応機構の詳細は未だ明らかではなかった。また、大気中の酸素濃度が平地の1/2となる標高5千メートル付近には、多くの高地住民が生涯にわたって生活しており、慢性低酸素下に永住する高地住民にどのような疾病が見られるのかも明らかでなかった。

私たちは定期的に京都で会合をもち、文部省科学研究費への申請、対中国との外交折衝、高所医学研究計画の立案、当時京大病院長であった戸部隆吉教授に対する隊長就任要請、隊員候補の人選、予備踏査隊の派遣などで3年はまたたくまに過ぎ去った。ここに、医学の既存のパラダイムを超えようとした試行の結果の試みが、1987年から数人の仲間たちと共に計画をはじめた「京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊」として結実した。

1990年5月17日から21日にかけて、京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊32名の隊員のうち22名が、チベット自治区にあるシシャパンマ峰(8027m)の登頂に成功した。日本人登頂者15名のうち6名が医師であり、そのうち2名は60歳の医師・齋藤先生と中島先生であった。

医学研究者が自らを被験者として、約2ヶ月間にわたってシシャパンマ峰を舞台に展開した「ヒマラヤにおけるフィールドワークとしての医学研究」の成果は、その後、「ヒマラヤ学誌」1号～7号として公表されている。その際のよき理解者が齋藤Y博士と中島博士である。以後、私たちが世界中で展開することになるフィールド医学の源流は、京大式の山登りとその精神で

あるアカデミック・ロマンティズムにうらうちされたパイオニアワークにあったように思う。

梅里雪山再挑戦隊（1996年）とその後

1991年1月3日夜から4日朝にかけて、日中合同梅里雪山登山隊17名の隊員が、雪崩によって亡くなった。その後、幾度も捜索隊、遺族巡礼隊が派遣されたが彼らの痕跡は不明であった。AACKでは、1996年に遭難原因の究明とともに、再度の登頂を目的とした隊を派遣した。総隊長は齋藤Yさんだった。隊は、遭難ルートを検証しながらキャンプをすすめ、登山隊は頂上直下まで達した。ちょうどその日、日本の気象担当者からサイクロンが近づいている、との報告があった。齋藤総隊長は、アタック隊の全員にベースキャンプまでの待避を指令した。全員がベースキャンプに待避をおえた翌日、サイクロンは、脇にそれて梅里方面に影響をおよぼさないことが判明した。これを受けて、隊員間では、再々挑戦を行うべきか、このまま待避すべきかの大議論が行われた。隊員間の意見は、真っ二つに分かれたが、齋藤総隊長は、今回は登頂を諦め全員撤退を決定し、私たちはメコン川を経て帰国した。ところが、1998年7月18日、明永村民3人が放牧中、明永氷河(ナイノゴル氷河)3800メートル付近で、梅里隊のものと思われる遺体と遺品を発見した。京都からは、数次の収容隊を派遣して、隊員1名を除いての遺体と遺品を回収した。とくに、AACK会員の小林尚礼は、毎年のように現地を訪れ捜索し、おびたしい数の遺体の断片と遺品を回収し、ご家族にお返しした。

2022年11月3日、比叡山延暦寺元三大師堂ならびに鎮嶺碑前にて、ご家族、京都大学学士山岳会、山岳部、探検部関係者約50名の参詣のもと梅里雪山33回忌の法要が執り行われた。このお膳立てを行ったのは、比叡山にも友をもつ齋藤Y先生だった。

四条南座前の「齋藤診療所」

齋藤Y先生は、本務病院の長岡京の新河端病院の院長を務めるかたわら、四条南座前の貸しビルの一室で夜診のための、診療所を長い間にわたって開いていた。夕方6時から8時までの診療で、私も手伝ったことがある。京都の中心なので、おそらく、患者さんにとっては、とても便利な夜診機関となっていた。齋藤先生

は、岳人としては有名な医師だったので、凍傷患者、高山病予防のための相談にくわえて、祇園のおかみさん等々、多種多様な患者さんであった。齋藤 Y 先生は、どの患者の訴えも丁寧聞き、門前市をなすような盛況ぶりであった。

齋藤 Y 先生が、新河端病院に入院されて、齋藤診療所の継続が難しい状態となった際に私はよばれ、診療所は 11 月一杯で閉院するから、

すべての患者に紹介状を書いて欲しいと依頼された。患者さんによっては、診察室を覗いて、「なんだ、齋藤先生ではなくて、若い医師か！またくるわ」という患者さんも少なくなかった。若いと言われても私も 74 歳である。貫禄の差なのであろう。

齋藤 Y 先生は、岳人としても、医師としても、また人間としてもすばらしいかたであった。心よりご冥福を祈るばかりである。合掌

齋藤惇生さんを悼む

山本良三

1929 年、熊本生まれの齋藤ドクターは、ワイさんの愛称で、誰からも愛され、信頼されていた外科医で第 19 代目の日本山岳会会長となり、医者で会長となった初めての人であった。

旧制五高山岳部出身のワイさんとは、私の好きな五高の代表寮歌「武夫原頭に草萌えて」を一緒に歌いたいねと話し合ったことがあったが、叶わなかった。

1965 年ごろ、私は静岡大学の教授であった酒戸弥二郎氏の指示で、ワイさんが台湾の羅東博愛医院へ赴任されていた時、手紙のやりとりをした覚えがある。随分と古い話で、内容は忘れたが、酒戸先生の言葉を伝えたような気がする。当のワイさんと初めて会ったのは、遠い昔のこととてよく覚えていないが、JAC の医療委員会の席ではなかったかと思う。

ワイさんの海外遠征記録は、1962 年のサルトロ・カンリを皮切りに、96 年までの 34 年間に 9 回を数える。ヤルン・カン、チョモランマ、シジャパンマ、ナムナニ、ナムチャバルワ、梅里雪山等世界によく知られた山々である。それも、単なる遠征隊医師としての参加ではなく、AACK 隊、JAC 隊をはじめ日中合同登山隊や日中ネ合同登山隊など海外との混成部隊を率いて、その副総隊長を 3 度、統括隊長を 1 度、総隊長を一度務めている。

1990 年の京大ヒマラヤ医学学術登山隊では、60 歳で副隊長として、もう一人の副隊長の同期の中島道郎（ダンナ）さんと共に、8000 m

峰の頂に立った。高齢者の 8000 m 峰登頂が非常に珍しい事例であった時代のことである。

京都の新河端病院長としての立場でありながら、あれだけの海外遠征に参加できたのは、周囲の人たちからの協力と支援があったからこそであろう。ワイさんの偉ぶらない誠実な人柄がそれを可能にしたと思わざるを得ない。ワイさんなりの悩みや苦悩はあったに違いないが、それらの全てを克服できたのは、彼の人柄と人脈と使命感ではなかったかと思う。

1952 年の暮れから新年にかけて、京大山岳部の厳冬期知床半島縦走計画に、ワイさんと同期の中島ダンナは参加した。リーダーは、後年京大医学部長を務めた伊藤洋平氏であった。伊藤氏は名古屋の八高時代から岩壁登攀に名を馳せた登り手だが、AACK 内ではもう一つ人気がなかった、と言われている。

兵庫県の裏日本出のスキーマスターであった中島ダンナは縦走隊員の一人に選ばれて知床岬近くからスキーを履いて取り付いたが、ハイマツに積もった雪が安定せず、悪戦苦闘の連続で、“世界最悪の旅”であったと記述している。雪の降らない熊本生まれのワイさんは、霧ヶ峰でダンナさんからシュテムボーゲンまでのスキーの基礎を習っただけで、出かけたと言うからさぞ大変な思いを味わったに違いない。毎日新聞社の後援を得て 12 名の部員で実施されたこの知床計画は、まさにヒマラヤ遠征の国内版で、後にメンバーのうち 8 名がヒマラヤで活躍した。

京都で病院長を務めながら、JACの会長職は激務であったらと思う。京都と東京を行ったり来たり。当然ワイさんは会長職を辞退したかったのだが、周りの若い人たちはそれを許さなかった。当時、会長になりたくて仕方のない人はいたが、会長は周りから望まれる人が相応しい。自薦する人に会長はやって貰いたくないというのが世の常というものだ。

私は当時JAC理事をしていたので、ワイさんを会長に推薦することについて、会の長老である田口二郎さんに意見を求めた。田口さんの判断はいつも公平だと感じていたからである。田口さんは多面的な観点から“ワイならいい”と明確な意見を口にされた。

また、或る日或る時、私は仕事で北京に滞在していた。すると、中国登山協会の交流部の日本担当者が、私へ突然電話をかけてきた。“JACの藤平正夫会長が某ホテルの何号室に宿泊中で、この時間なら部屋におられる”という。早速電話を入れると、“どうして私がここにいることが分かったのだ、誰も知らないはずだが”と藤平会長。私は、田口さんの意見を交えて次期会長候補にワイさんが望ましいと伝えた。“何だ、お前もそうなのか、よし分かった”と言って電話は切れた。

1987年、私が静岡大学西域学術登山隊を組織したとき、中国ヒマラヤ初挑戦であった私には、中国登山協会に全くコネがなかった。そこで、ワイさん、ゴロー（岩坪五郎）さん、ポコ（平井一正）さん等に相談した。そして、中国登山協会主席の史占春氏と昵懇の仲である京都国際交流協会の吉田與和氏を紹介されて、北京へ御同行願ひ、未踏峰皇冠峰（英名：クラウン）遠征の議定書締結に至った。

その後、予定していた登山隊の医師が参加できなくなって困り果てた時も、医師探しをワイさんをお願いした。ワイさんは台湾に勤務した経験から中国語が話せた上、中国ヒマラヤへの度重なる遠征によって中国登山協会首脳陣に絶大な信頼があった。そこで、ワイさんを通して人民解放軍の軍医を使う案、無線機を持参して万一の場合には軍の特殊ヘリコプターを飛ばしてもらおう案、などの検討を進めてもらったのだが、残念ながらうまくいかなかった。

この遠征は、渇水期しか渡れないシャクスガ



写真1 或日ゴローさん宅で、左から山本、秋野子弦さん、岩坪ゴローさん、座椅子：ワイさん

ム川を経て新疆側からカラコルム域へ入る関係で、5ヶ月間孤立無援状態となるので、どうしても医師を帯同したかった。短期間で医師が見つかるかどうか不安であったが、或る日ワイさんから“京大出の医師が見つかった”と連絡が入った。社会人山岳会所属の清水久信医師だという。“地獄で仏”とはこのことかと思った。

結局、初登頂は果たせなかったこの遠征の帰路、清水医師はカシュガルで多くの現地食品を食べ歩くという健啖家ぶりを見せていた。そのせいであろうか、帰国して腸チフスを発症し、一緒にいた我々も保健所に呼び出されて、検査を受けるというハプニングがあった。

その後、清水医師は、1990年にAACKが派遣した日中合同梅里雪山第二次登山隊に参加したが、翌年1月3日を最後に交信が途絶えた。17人全員の遭難が伝えられた。中国雲南省の最高峰、梅里雪山の標高5100m地点の第3キャンプに想像を絶する巨大な雪崩が襲ったものと考えられている。

私が清水医師と一緒にいたのは、遠征期間中のわずか6ヶ月間に過ぎなかったが、ほっそりとした体の割には頑強な身体能力を持ち、温厚な人柄は誰からも信頼された。人里遠く離れたヒマラヤ遠征にはうってつけの医師であった。

しかし、彼は数度のヒマラヤ遠征に参加しながら、ついに一度も初登頂の感激を味わうことなく逝ってしまった。琵琶湖から吹く風を受けながら、清水医師の生家での葬儀にゴローさん等と共に列席した。

ワイさんに話を戻すと、我々の推薦を受けてJAC会長を拝命する前には、今西錦司さん

の音頭で設立された JAC 京都支部の初代支部長を 10 年余にわたってつとめ、更に、我が JAC に設立したアルパインスキークラブの代表を 2002 年から 07 年まで引き受けて、アル

パインスキーを楽しんだ。

もう二度とワイさんのような多彩な活動をした医師が現れることはないだろう。 合掌。

チョモランマの Y さん

横山宏太郎

齋藤惇生=Yさんにはいろいろお世話になったけれど、私の場合は特に 1979 年のチョモランマ偵察、80 年の本隊で一緒にいたことが大きい。その縁で、日本山岳会 (JAC) の会報「山」に追悼文を書いた (注 1)。Y さんが西堀榮三郎さんからの強力な要請で偵察隊長を、そして本隊への参加も引き受けたこと、医師として、心臓に不安のある隊員をアタック隊からはずすよう進言したことは重要なことだがそこに書いたので、ここでは詳しくはのべない。実はそのもとは AACK 時報の Y さんの記事 (注 2) である。AACK 時報も「山」バックナンバーも、だれでもネットで見る事ができるので、なるべく話の重複は避けて、チョモランマの Y さんの思い出を中心に書くことにする。

1979 年 8 月、Y さんが西堀さんからの電話で偵察隊長を引き受けた後、高田 (上越市) に帰省していた私に電話があった。たしか岩坪五郎さんからだった。「JAC がチョモランマにこの秋に偵察隊を出す。隊長は Y さんだ。AACK からひとり隊員として行けるが、行くか?」

もちろん否のはずがない。チベットはいつかは行ってみたいところだった。2 年前にはネパールのランタン・リ偵察でティルマンのゴルからチベット側を眺めていつ行けるかと思った記憶も新しいうちにこんな話が来るとは思いもしなかった。願ってもないチャンスだ。

しかし一つ問題があった。予定では、翌年 1980 年出発の第 22 次南極観測隊で越冬することになっていた。井上治郎さんが 22 次隊で内陸調査をするので、経験のある私が手伝いに参加する計画だった。それでは 79 年偵察はなんとか行けるとしても 80 年本隊への参加は無理だし、2、3 年はヒマラヤへ行けない。

AACK 事務局長でもある井上さんと相談した。「これから AACK も当然チベットからのヒマラヤ登山を目指すことになる。自分はそれに賭けたい」、「わかった、お前はチベットへ行け」。

偵察隊の出発まで間がないので、すぐに東京へ行って、準備作業に加わった。偵察隊員も、翌年の本隊隊員有力候補たちも、初対面のひとがほとんどだったし、あとでわかったのだがヒマラヤの実績充分なひとばかりだった。しかしみな親切で、仲良くしてくれたのでたすかった。JAC にはこの時に入会した。

Y さんも面識のある人は少なかっただろうが、サルトロ・カンリのサミッター、ヤルン・カンの医師という実績は知られていたはずだし、JAC でも幹部のひとたちとは、面識・交流はあったのかも知れない。

はじめての中国からの登山であるから、わからないことも多く、しかも時間のない中での検討、準備はたいへんなことだったが、中国語が使えて、中国への渡航経験もある Y さんの貢献は大きかっただろう。しだいに、偵察隊長としての Y さんへの信頼は強くなっていった。それは中国に入ってからと同様で、登山協会の重鎮たちをはじめ隊に同行する連絡官や通訳、現場スタッフも Y さんと協議をしながら信頼できる相手と認めていったようだった。そして、周りの人たちは Y さんのファンになっていった。チョモランマ登山を進めるうえで、Y さんの存在はたいへんおおきなものだった。

偵察隊事故

順調に進んでいた偵察活動だったが、北東稜ルートでノースゴルへ登る途中の 6800 m 付近で雪崩事故が起こった。4 人が流され、残された尚子平さんと私は現場へ急いだ。中国の 3 人はクレバスに落ちて埋められ行方不明、長谷

川良典さんだけがちょうどスノーブリッジに落ちていて、姿が見えた。6500 m キャンプ (C3) で気がついた中村進さんと北川敏孝さんが駆けつけてくれて、長谷川さんを C3 に収容した。経験豊富な中村さんが BC への伝令に走り、帰りに酸素ボンベを持ってきてくれた。不眠不休、26 時間の行動だった。Y さんも、北壁側メンバーも救援に来てくれた。Y さんの診察と応急処置を受け、長谷川さんは少しずつ回復し、自力で歩いてベースキャンプに戻った。私達は 3 人を残して帰路についた。

ラサまでの途中で温泉に寄った。3 人を失って辛い帰路の中、わずかなくつろぎの時間だった。リラックスした表情の、Y さんと李友林通訳の写真が残る。

遭難の責任を背負う Y さんに、中国側はぜひ来年の登山を成功させようと応じる。そして Y さんは翌年の本隊へも参加する覚悟を決める。



写真 1 温泉でくつろいだ表情の齋藤 Y さんと李友林通訳 (右)、1979 年

本隊

1980 年の本隊は 2 月に出発した。AACK からは Y さん、同期の甲斐邦男君、私の 3 人が参加した。Y さんは医師としての立場もあり、後詰になるのだが、その代わりに、私たち 2 人の活躍を期待しておられたことが、AACK 時報の記事 (注 2) からよくわかる。私は前年の高度順化もあって前半は好調で、隊の先頭をきって 7000 m のノースコルに到達した。Y さんは喜んで京都ムラカミ・村上栄治さんに、「横山

があなたの造った高所靴を履いて日本人で初めてノースコルに立った、ありがとう」と手紙で報告された。AACK の 3 人は、歩きはじめると暖かくなるという保温性抜群のムラカミ特製の靴だった。私はその後膝に痛みが出た。甲斐も不調な時期があり、Y さんは「二人が故障と聞いて、心中面白くないことおびただしかった」と書いている。申し訳ないことだった。最終段階では甲斐はサポートに活躍したし、私の膝は回復、また天気予報で貢献したので、Y さんの期待に充分には沿えなかったがなんとか納得していただけたかと思っている。

中村隊員を C4 に泊める

北東稜ルートからは加藤保男隊員が単独で 5 月 3 日に登頂した。登頂断念した中村進テレビカメラマンと 2 人は別々に 8700 m でビバークする。この夜のチョモランマはほぼ無風だった。明けて 4 日、加藤・中村は合流して降りてくる。サポート隊に迎えられ、2 人は C7 についた。最終段階では、Y さんはノースコルの C4 から前線に指示を出す立場だった。「中村を早く下ろして酸素を吸わせるべきだ、C6 まで降りよ、明日は天候悪化の予想だ」という Y さんの指示に従い、極度に消耗した中村さんも C6 まで降りた。翌日は風雪の中を下降して、C4 へ。一刻も早く高度を下げて回復を早めるべきだが、中村さんを見てそれすら難しいと、Y さんは C4 に泊めることにした。翌日、長谷川さんは中村さんを支えながらノースコルの斜面を下る。C3 に下りてびっくりしたことには、朝方に、中村さんの使っていたテントを巨大な落石が直撃したという。C4 に泊めたことが結果的に彼を救ったのだ。

中村さんは 1988 年、中日ネ三国合同隊で、テレビカメラマンとしてチョモランマ登頂に成功し、頂上からのナマ映像を初めて世界に届けた。しかし残念なことに 2008 年、クーラカンリで雪崩のため遭難された。



写真2 ノースコルのC4で、C3へ下る準備をする
左から小原・中村・長谷川各隊員と齋藤Yさん、
1980年5月6日

デカさん追悼文（注3）

2023年2月、AACK元会長、マサコン隊隊長の堀了平（デカ）さんが逝去された。AACK

Newsletterで、追悼特集への寄稿を呼びかけた。Yさんとは旧制第五高等学校からのお付き合いである。「デカさんの追悼文は自分が書かねばならない」と言って下さった。しかしなかなか原稿が届かない。時々電話が入るが、「なかなか進まない、もう少し」とのこと、やはり2012年の大怪我の影響は大きかったようだ。「大事な原稿なのでお待ちします」と言い続けた。

ついに手書きの原稿が届いた。最後は入院後に書いてくださったものである。頭が下がる思いで急いでワープロ打ちしてプリントを郵送し、確認していただきOKが出た。110号の発行は2025年2月21日になった。はからずもYさんの絶筆となったこの文章は、多くの人の感動を呼んだものと思う。

YさんはJACの隊に4回参加された。行を共にした隊員はみなYさんのファンになっている。その人たちがYさんのご葬儀に際し、思いを綴った小冊子を用意した。すでにwebで公開されていたこの追悼文も掲載され、会葬の皆さんに配られた。さらに感動を広げたことだろう。

雪見舞いの電話と「チベット紀行」

2月、なにげなくスマホを見ると、前日にYさんからの着信が記録されていた。ふだんはスマホにほとんど注意を払っていないので、着信があっても出ないことが多い。この時も、手元に置いていなかったのだろう。これは失礼してしまった、なにごとか、とかけてみると、なんと雪見舞いの電話をくださったのだった。それ

までも、地震や大雨など災害があると、電話や熊本の名産などで見舞いをいただいていた。しかし今はご自身が入院されているのに、そんなに気にかけてくださるのか、と驚き、また感謝した。

ようやく、3月に入ってお見舞いに伺った。発行されて間もない「チベット紀行」（注4）を持参した。2015年、AACH（北大山の会）メンバーたちの一行が、チベット高原を周回する旅行をした、その紀行文が主体である。親しい友人が編集を担当しており、1979年の偵察から81年にかけての私の3回のチベット行のころの状況との比較も内容に入りたいとのことで、私もほんの一部を書いた。79年、Yさん隊長のチョモランマ偵察隊がポタラ宮の屋上で撮った写真を入れた。写真の中央はYさんだ。本を開き、その写真を見てもらうと、嬉しそうになづかれた。間に合ってよかった。

「ありがとう」と仰るので、「とんでもない、こちらこそありがとうございました、Yさんのおかげでおもしろいことがたくさん出来ました」と答えた。

Yさんとのいちばん古い記憶はおそらく50年以上前の冬のこと、雪の花脊峠を一緒に歩いて越えた。私は、幼かったお嬢さん、かんりさんをおぶって。花脊スキー場行きのバスが、たぶん雪のためだろう、峠の手前で動けなくなったのだ。

「コータロー、南極はどうね」と尋ねられたこともある。北村泰一さん（第1次、3次越冬）から、自分が越冬隊長で行くことになったら付き合ってもらえるか、という打診があったらしい。厳しい健康診断をクリアした隊員なので病気は少ないが作業中の怪我はある、また南極ならではの面白いこともある、などとお答えした。実現すれば「南極の名医」にもなられただろう。

結局は実現しなかったランタン・リ登山隊。1977年か、最初にネパールへ提出したアプリケーションには、副隊長・齋藤惇生とある。隊長は中島暢太郎先生だった。

2022年11月、梅里雪山33回忌法要を比叡山延暦寺・横川で執り行った。それが実現できたのは、Yさんのお力によるところが大である。

お礼など言い尽くせないほどのお世話になった。ここからご冥福をお祈りいたします。



写真3 ポタラ宮屋上にて、チョモランマ偵察隊員と通訳、ポタラ宮スタッフ。中央の齋藤偵察隊長から右へ長谷川良典、高見和成、右端は李友林通訳。齋藤隊長の左へ1人おいて李俊光通訳、尾崎隆、左端は横山、1979年

- 注1) 横山宏太郎 「追悼齋藤惇生さん」 (2025)
日本山岳会「山」961 p8
- 注2) 齋藤惇生 「チョモランマ登山をふりかえって」
(1982) AACK 時報 No.9 p65-72
- 注3) 齋藤惇生 「堀了平デカさんの追悼」 (2025)
AACK Newsletter No.110 p1-4
- 注4) 北大山の会チベット調査隊 (編著) 「チベット紀行」 (2025) いろす

資料 齋藤惇生さん略歴

齋藤惇生 (医学博士、新河端病院名誉院長)

- 1929年9月9日 出生
- 1948年 旧制第五高等学校入学
- 1949年 京都大学入学 同時に山岳部入部
- 1955年 京都大学医学部卒業
- 1962年 日本・パキスタン合同サルトロ・カンリ遠征隊
サルトロ・カンリ (7742 m) 初登頂
- 1973年 京都大学ヤルン・カン学術遠征隊 医師
- 1979年 日本山岳会珠穆朗瑪登山隊偵察隊 隊長
- 1980年 日本山岳会珠穆朗瑪登山隊 副隊長 (医師兼任)
- 1985年 日中友好納木那尼 (ナムナニ) 峰合同登山隊 副総隊長
- 1986年 日本山岳会京都支部 (現 京都・滋賀支部) 支部長 (初代) (~1997年)
- 1988年 中国・日本・ネパール 1988年チョモランマ/サガルマタ友好登山隊
日本隊北側統括隊長 (医師兼任)
- 1990年 京都大学シシャパンマ医学学術登山隊 副総隊長 (登攀担当)
同峰登頂
- 1991年 梅里雪山救援隊総隊長 (日中合同梅里雪山第二次学術登山隊)
- 1992年 日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊 (第二次遠征隊) 副総隊長 (日本側)
- 1996年 日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊 1996 日本側総隊長
- 1997年-1999年 日本山岳会会長
- 2012年11月4日 吉野・白鬚岳で怪我 (頸椎骨折)
- 2025年3月11日 逝去 満95歳

この略歴は日本山岳会、AACK ほか多くの方のご協力をいただいて取りまとめました。ご協力の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。(横山宏太郎)

齋藤惇生さん・酒井敏明さんへ

追想昭和29年夏山(二人のリーダー)

川崎 徹

齋藤ワイ(惇生)さん、酒井オシメ(敏明)さん、出来の悪い山岳部員だった私を丁寧に指導していただき、また親しくお付き合い下さりありがとうございました。謹んでご冥福お祈りします。

以下は70数年前の出来事であり、資料は散逸していて、記憶の誤りもあると思いますが、昭和29年夏の山行の様を記述してみました。

宇治分校から吉田分校に移って間もなく、私はクラスメイトだった高村デルファ(泰雄)さんの紹介で山岳部に入部しました。当時のリーダー齋藤ワイさんはデルファさんと同じ下宿、しかも隣室に住んでいました。トリスを下げてお互いに酒好きのデルファを訪ねると「アワモリ来とるんか」とワイさんが顔を出し酒盛りに加わることもありました。

昭和29年は戦後色がまだ残っており、米は配給制で国発行の食券がないと食堂でご飯が食べられない時代でした。京大山岳部にはもともと登山スタイルをかまわない風土があったのか、服装はバラバラで古いウールのシャツ、茶色の作業ズボン、野球のソックス、古い背広のチョッキというのが私の登山姿でした。この頃の京大山岳部は登山靴を履いているのは少数で殆どが地下足袋を履いていた。山で会う他の大学の山岳部は殆ど登山靴を履いていたので特異な集団だった。ただ背負っているのは全員一澤帆布製のキスリングでした。

比良での新人歓迎山行、道場での岩登り合宿を終え、いよいよ本番の剣合宿ですが、今では到底考えられないほどキャンプ地が遠かった。まだ立山ケーブルは開通していなかったため、朝、集合地の立山藤橋を出発し称名川に沿って歩いた。称名の滝の手前八郎坂の登り口にある休憩所で荷物を計量し振り分けをしたが、合宿、縦走約20日分の食料、帆布のテント、麻のザイル、etc、70kgを超える重量であった。肩に

食い込む荷物の重みに耐えながら八郎坂の急登を登り切り、平坦な道を歩いて追分小屋までが1日目の行程であった。2日目は天狗平、地獄谷、雷鳥沢、剣沢を下って、午後遅くなってやっと真砂沢出合のテント地に着いた。その直前小さなアクシデントがあった。同回生の植原ドロスケ(正行)さんがキャンプ地目の岩場でスリップし3mほど転落した。幸いにも岩棚で止まったがその先には雪溪の割れ目があり雪解け水がとうとう流れていた。危ないところであった。だが頭を負傷し出血したのでワイさんが応急手当をし他の部員がついて下山した。当時夕食は飯盒炊爨が定番だったので、キャンプ地に石を集めてかまどを作り、薪集めをする作業が待っていた。そのため雨の中で焚き火が出来なければ登山家として一人前でないとまで言われた。ちなみに朝食はアルファ澱粉を水で練り餅状にしたものに黄な粉をかけたもの、昼の行動食は進々堂特製の乾パン6枚にマーガリンだった。ある日雨が降って沈殿となったが、同じテントにいた藪内ラショウ(卓男)さんが古新聞を取り出し、テントの内側に張り付けはじめた。テントの内側に浮かんだ水滴を裾のほうへ誘導していたのである。キャンパスのテントは古く雨漏りしていたのである。

こうして1週間の合宿は終わり、いくつものグループに分かれて縦走に入った。私は酒井オシメさんがリーダーの黒部東沢谷廻行グループに参加した。メンバーは3回生酒井オシメさん、高谷ハチコウ(好一)さん、谷カンザン(泰)さん、1回生岩坪ゴロー(五郎)さん、潮崎パイマン(安弘)さん、2回生川崎アワモリの6名だった。

われわれのグループは齋藤ワイさん、高村デルファさん、本多勝一さんらいったん針ノ木峠を越えて下山し、南アルプスへ向かうグループと一緒に、真砂沢出合のテント地からハシゴ谷乗越を越

えて内蔵助平にテントを張った。その晩私は体調不良になり、熱が出て全く食欲がなかった。その日は冷たい雨の中の行動だったので風邪をひいていたのだろう。幸いワイさんがいたので診察をして薬をくれた。あとから聞いた話であるが、その時はアワモリをどのようにして秘境から下ろすか真剣に検討したそうである。翌朝にはかなり良くなっていたので荷物を軽くしてもらい予定どおり出発した。平の渡りで別れるとき、ワイさんは私の体調を気遣ってくれたが、その時私の体調は殆ど回復していた。

今は黒四ダムの湖底に沈んでいる平の渡りでワイさんたちと別れた酒井隊は黒部川左岸に取りついた。当時黒部川平の渡しから上流は秘境と言っていいほど殆ど人の入らない場所だった。道、踏みあとは殆どなく、川沿いに高まきや渡渉を繰り返して進み、午後遅くやっと東沢谷の合間にテントを張った。黒部川の上流はイワナの宝庫だと聞いており、早速オシメさんが用意してきた釣り糸を全員黒部川に垂らしたが、釣り上げたのはわずか数匹に過ぎずそれを6人で分けて食べた。翌朝通り過ぎた川沿いの水たまりには、イワナがわれわれをあざ笑うように悠々と泳いでいた。そのあと東沢谷でイワナ釣りをする機会はなかった。

東沢谷は明るく広い谷だった。ただ印象に残るような景色、出来事はなく草をかき分け何度も渡渉をし、ただひたすら歩いたという記憶しか残っていない。2日かけて水晶岳とワリモ岳を結ぶ稜線にでて長い長い黒部東沢谷廻行は終わった。そしてワリモ岳、鷲羽岳と縦走し三俣

小屋の近くにテントを張った。その夜夕食のときオシメさんがキスリングの底に隠し持ってきたウイスキーで東沢谷廻行成功を祝って乾杯した。そのあと、双六岳、抜戸岳を經由してまだ再建されず倒壊したままの笠ヶ岳小屋あとにテントを張って1泊、翌日槍見温泉へ下山し、昭和29年夏山縦走は終わった。

最近の国土地理院の地図を見ると、我々が東沢谷からつめた水晶岳とワリモ岳を結ぶ稜線あたりに、水晶小屋がありそこから水晶岳、赤牛岳を經由して読売新道が黒部川に向かってのびている。ちょうどわれわれがテントを張った出合近くに奥黒部ヒュッテがあり、さらに黒四ダムの堰堤まで道が続いている。もはや東沢谷も秘境ではない。

その後私は一時休部したこともあって、学生時代オシメさんと一緒に山行したことはなかったが、1998年同年代が第一線を退く年代になり、高村デルファさんの発案で学生時代の山仲間が集まって、旧交を温めようということになり、1泊2日の山登りの会が始まった。OKYAN(岡山の山を登る会)である。中国山地高山の紅葉が始まる10月最後の土日を例会日に決め、美作三湯(湯原、奥津、湯郷)をはじめ温泉を基地にして、登山と入湯を通じて学生時代の旧交を温める会がはじまった。多い年には東京、九州からの参加者も含め30名くらいが参加した。勿論齋藤ワイさんも酒井オシメさんも常連であった。しかし寄る年波には抗いがたく、藪内ラショウさんの追悼山行を機に10数年の幕を開じた。

酒井敏明さんへ

オシメを想えば山恋し

左右田健次

私たちが京都大学に入学した昭和27年(1952年)は戦後の名残が消えようとしながらも消えきれない時代でした。その1年前には時計台前で京大を訪問した天皇を囲んで戦争責任を問う「京大天皇事件」が起こりました。大仏次郎作、

嵐寛寿郎主演の「鞍馬天狗：鞍馬の火祭」が映画化され、美空ひばりが杉作少年を演じました。学生食堂などで食事をするのに食券(外食券)が必要であり、ご飯には麦や大豆が混じっていました。白米のご飯は「銀シャリ」と呼ばれて

いました。教養部1回生は宇治キャンパスで講義を受けました。ここには敗戦時まで陸軍の火薬製造工場と火薬庫があり、その残骸を利用した教室での学生生活でした。大学のキャンパスを出たら舞妓さんや芸妓さんがカラコロと歩いていると思っていた三河の田舎出の私には想像もしなかった世界でした。草の茂る構内の一角に建つ小さな小屋が山岳部のルームであり、将棋部との共用でした。その前年、山岳部の新入部員全員が先輩に反旗を翻して退部し、その後、入部してきた並河ネボケ、川瀬など2、3人だけが山登りをしていたという寂寥寥々たる有様でした。その翌年、期待を担って私たち10数人が入部しました。中には剣岳付近を歩き回り、岩登りの経験もある富山出身者もいました。しかし、なぜかまたも経験豊かな連中が次第に退部していきました。あまり期待されていなかった3、4人が残りました。高谷ハチ公、酒井オシメ(敏明)、谷泰くん、私、少し後から入部してきた松井サルタンなどです。

オシメさんはいつもヨレヨレのズボンをはいて、オシメの綽名がなんとなく合っていました。私とは気が合って、鈴鹿の愛知川源流や京都北部の山を登り、三河の田舎で日本酒の蔵元をしていた我が家を訪れて何日か滞在し、奥三河や鈴鹿の山々を登りました。オシメさんは英文学専攻でアイルランド文学、特にイエーツが好きでした。雨でテントに閉じ込められた日には、アイルランドのイエーツの文学を訥々と語ってくれました。なぜ、シェークスピア、トーマス・ハーディやブロンテ姉妹でなく、アイルランド文学に興味を持ったのか、分かりませんが、脚光を浴びないところに魅かれる彼らしい好みであったといえましょう。中国の青島生れといっていました。英文科を卒業して高校の英語の先生を務めて、間もなく人文地理学に方向転換しました。少し驚きました。「牧夫フランチェスコの一日」、「牧夫の誕生」などで健筆をふるった谷君の影響もあったのでしょうか。中国の四川省や雲南省の山岳地域の人文地理学や登山家に関する著書を出し、そのたびに私にも贈ってくれました。オシメさんは専門の英文学や人文地理学においても登山においても生真面目でした。山においても休むごとに地図を取り出して綿密に読み、綿密に記録を取りました。雄弁家でもないのに、話が山や専門の人文地理学に及

ぶと呆れるほどに饒舌になりました。10年ほど前、私がたまたま「忘れ去られた王国：落日の麗江、雲南滞在記」(ピーター・グウラート、西本晃二訳、スタイルノート社、2014)を本屋で見つけて読みだしたことがあります。納西族の古都麗江を舞台に少数民族の栄光と影を描いた記録です。著者も発行所もあまり知られておらず、さすがのオシメも恐らく知らないだろうと思って、尋ねたところ既に読了しており、著者に関するエピソードも教えてくれました。正にオシメのオシメたる所以です。

梅里雪山峰の第1次遠征の折にもオシメさんは参加して、こまごましたことに気を配ってくれました。記録の少なかったこの山域の情報を調べ教えてくれました。私が避けえぬ事情で中国人隊員数人とともに一足先に帰らなければならなくなったとき、中国語に不慣れな私をおもんばかりで、途中まで同行してくれました。彼がベースキャンプに戻ったのは恐らく夕暮れを過ぎていたでしょう。私は年来の友人の恩情に胸の塞がる思いでした。ワイさんに関する別の文章にも書いたように、3年ほど前、五郎さんと五郎夫人吟子さんの発議で、ご夫妻、齋藤ワイさん、オシメさん、私の5人で唐の時代の詩をオックスフォード大学で哲学、音楽原論を学ぶ中国女性 Huishu さんからオンラインで勉強したことがあります。若い時から中国語を勉強していたワイさんは例外でしたが、私たちは難しい中国の発音に泣きました。杜甫、李白、王維、王翰、白居易、李商隱、杜牧など皆、美しい詩なのになぜ発音はあんなに難しいのでしょうか。努力家のオシメさんは別に中国語の本を買い入れて予習をしてきました。しかし途中で耳の病気に罹り、難聴に苦しみました。予習を怠ることはありませんでした。「三つ子の魂、百まで」：オシメはオシメらしさを最後まで貫きました。オシメさんのお葬儀の連絡をお嬢さんから頂きながら私は入院中で参列できなかったのは悔やまれます。

「山を想えば人恋し 人を想えば山恋し」：信濃大町の登山家にして詩人、旅館「対山館」の主人であった百瀬慎太郎の詩です。オシメさんを想うとこの詩を想います。

編注 文中綽名の方々(順不同)：並河治、高谷好一、川瀬裕史、松井敦男、岩坪五郎、齋藤惇生

酒井先輩へのことば

谷 泰

酒井敏明さんは、大学入学の年次で言えば同年、しかも文学部学生であった点では、まさに同期の桜です。しかしわたしは2回生から山岳部に入部しただけに、酒井さんは先輩。おまけに終戦後に大連から帰国したため、学年進学上の遅れを経験しておられるとのこと、いっそう先輩的地位におられる。

その酒井さん、あなたは最初学部時代は文学部英文科に属しておられた。その時代であったか、一度酒井さんのお宅に伺ったことがあります。御父君は敗戦後の引揚げのあと手に入れられた下京ご自宅で、当時普及し始めたビニールシートの加工をする仕事をしておられた。そういうこともあって山行用の防水袋をいくつか作っていただくための訪問でした。とても謹厳なお方で、引揚者と言って技術系の方であれば引き続き会社に勤め続けられたに違いない。だのに大連時代の御父君は文科系のご出身であったのか、引揚げたあと、こういう似合わぬお仕事をして息子を大学に行かせておられたのでしょうか。英文科という当時であれば学校教師以外に就職先もない分野を選ばれたのは、謹厳な御父君に似てのことか。こんなことを思ったことでした。

ところで当時の山岳部はそれこそできれば大学院まで残って、海外の高い山を目指したいという思いをもったひとで溢れていた。酒井さんも同じ思いのもと、その情熱の赴くまま、海外登山になじむ研究分野を選びなおそうとされたのでした。英文科を出たあと、再び人文地理学を専攻しなおすことから始める。こうして大学

院時代のときにアフガニスタン・パミール地域のノシャック峰の登頂を果たす。そして京都大学文学部人文地理学科の伝統的研究分野である歴史地理学の研究者として、主にパミールを中心に、ヒマラヤ地域での旅行家の旅行ルートを再構成する。またのちにはヒマラヤ・カラコルム地域での登山家たちの足跡をたどる作業をなされた。あまりにも几帳面で、わたしには近づきがたい存在であり続けました。

山とのかかわりでの接点と言えば、あなたはノシャック登頂を済ませての帰路、パミール回廊のすぐ西のパダクジャンのシェワ高地を訪ねておられる。その18年後です。わたしもおなじシェワ高地の夏営地で羊・山羊を放牧するパシュトゥン遊牧民のもとを訪ね、牧人と家畜とのかかわりを観察すべく滞在しました。この点でもあなたは先輩です。ただ関心が異なることもあり、あなたがどういふものをそこで見られたのか。京都地下鉄、御陵のお住まいに伺った折にはいつも親切に受け入れてくださったのに、寡黙な酒井さんを前にして、そのことをうかがう機会を逸してしまいました。

いまはそれこそノシャック時代の仲間の廣瀬エト（幸治）さん、岩坪ゴローさんなどと下界のアフガン回廊を眺め下しながら、その時の旅の記憶をも語り合っておられることでしょうか。いずれわたしも遅ればせながらそちらに向かうことになる。その時にはシェワ高地で見られたことなどの話も聞かせていただこうかと思っています。よろしく。

オシメさんのいびき

安仁屋政武

酒井敏明（オシメ）さんは文学部史学科地理学教室の大先輩であるが、学で交わったことはない。地理学の学術交流の場として大きく日本地理学会と人文地理学会がある。私は氷河や

地形など自然地理学分野の研究をしてきたので、学会発表等は自然・人文その他全ての分野を包括している日本地理学会であった。ここでオシメさんと会ったことはない（記憶にな

い?)。オシメさんは彼の専門分野から人文地理学会で活躍されていたのかもしれないが、私はこの学会には参加していないので不明である。ということで、同じ教室出身ではあるが地理学での交わりは一切無かった。

酒井さんの名前は山岳部入部(1963年)以前から岩坪五郎さんと共にノシヤックの登頂者として知っていたが、直接関わりを持ったのは私が学術隊員として参加した1989年の第1次梅里雪山遠征の時で、オシメさんは副隊長であった。北京での準備中、遠征経験者として中国側の山関係者との打ち合わせ・交渉・挨拶などに精力的に動いて隊長の左右田さんを補佐していたのが印象的であった。が一番強烈な記憶として残っているのは、ス農での登山隊のベースハウス(BH)滞在中での経験である。学術隊員の私は基本的にここをベースとして周辺の氷河地形を調査した。ということで寝食を共にしたのだが、オシメさんのいびきには正直驚いた。私もいびきをかくことでテント仲間知られているが、オシメさんのは桁違いであった。オシメさんから遠く離れた部屋で寝ていたが、家中何処にいても彼のいびきから逃れられなかった。慣れるまで結構な時間がかかったような記憶がある。

BHに滞在中の10月、3日間(16~18日)



写真1 ス農のBHにて(1989年10月19日撮影): 立っているのが左右田隊長、座っている左が酒井オシメ副隊長、傘を差しているのが横山登攀隊長である。

大雨が降り続き至る所で道路沿いの斜面が崩れ、塀が壊れたりして一帯に大災害をもたらした。チベットの家の屋根は平らで泥を固めただけなので、BHの屋根もこの雨でどろどろに溶け泥雨が漏った。家の中は水浸しとなり、18日は外にハイパロンで屋根を作り寝た程であった。写真1はその翌日のもので、所在なく雑談を交わしている時の一齣である。隊長の左右田さんは18日に徳欽へ戻る予定だったが雨で延期。20日に、道路が崩れて車が不通となったので、瀾滄江(メコン川上流)を渡る橋まで歩いて行き徳欽へ戻ったそうだ。家の中でも傘を差すというのは、いかに雨漏りが酷かったかを物語っている。雨だれた泥水は寝袋に染み込み、帰ってから叩いてもはたいても泥が舞い上がるのには往生した。写真2はス農の村祭り?(聞いてもよく分からなかった)の時のもの。日本側隊員はチベットの民族衣装を借りて参加した。夕方からの晚餐後、民族衣装で着飾った若い女性と男性による歌とダンスがあった。今は昔の経験であった。



写真2 勇壮なチベットの民族衣装に身を固めた酒井さん(左)。右は学術隊員(歯科医師)の今西秀明さん(1989年11月2日撮影)。

今だから話そう。

岩坪吟子

オシメさん。酒井敏明さんも亡くなられた。なんでオシメさんなのと聞くと、五郎は、濡れたオシメをしているように、いつもしぶい顔をしてはるからやと云った。うまいことアダ名をつけるものやと感心したものだ。

五郎は年に1度、現在の我家でパーティーを開いた。客は夫々異なった学部にも所属している京都近辺在住の人たちだから、お酒が入るとちょっとした文化講演会になった。

活きたエビ、カニ、ステーキ、それに上尾庄一郎さんはいつも大きなケーキを持ってきてくださり、パーティーが終わりに近づいてケーキをいただく迄、それは2階のお風呂場に置かれていた。

山口克さんは、いつも近くの有名なおまんじゅうを持って来て下さった。

床に赤いじゅうたんを敷いて、オシメさんはお茶をたてて下さった。一人一人、おまんじゅうとお茶を味わってから席につく。

活きたエビ、カニ、ステーキ。それに上尾さんのケーキ。

色々な学部の人達であるから、それぞれが後に退かない。延々と議論は続く。山口克さん(アンマ)それに平井一正さん(ポコ)がからみはじめるとこれはしつこい。翌日、ポコは自転車に乗って山口さんの家まで行って続きの議論をふっかけたりしたようである。

年に1度であるが、それは20回は続いた。

オシメさんは2度、私の世話になっておられる。1度目は海外で自動車事故にあって日本に

帰って来られた。下顎骨骨折である。その時、私は京都第一赤十字病院で働いていたので骨折の処置をしたが、オシメさんは一度も痛いとは云われなかった。すごいことである。

2度目は御夫婦での外国旅行から帰られてからのことである。翌日奥様から電話があり、“主人の様子がおかしいの、椅子からすべり落ちるの”“いつから?”“昨日夕方、帰ってから”との返事。“バカ、すぐ救急車を呼べ”と云って私は第一日赤病院まで走って行ったら、しばらくたってからピーポー、ピーポーと救急車でオシメさん到着。頭が右にぼっこり腫れている。すぐ手術。同意書にサインを、と云われたが、オシメ夫人は“吟子先生、サインして。私、手がうまく動かないの”と仰る。

私がサインをして、手術開始。夫人を置いて私は家にとんで帰り、風呂敷に五郎のパンツやパジャマを包んで運び、手術が終わるのを待った。約4時間。12時ころ帰宅。五郎は当時転倒により後頭部打撲、退院直後で安静が必要であった。ちなみにその時のパンツやパジャマは返却していただいていない。オシメ夫人はその後パーキンソン氏病と判明。右手が動かなかったのはそのためであった。オシメさんの介護をうけて亡くなられた。オシメさんは、その手術がうまくいって元気になられたのでありました。

五郎は昨年5月心不全で亡くなり、オシメさんも昨年12月に亡くなられました。

寂しい限りであります。

2025年7月7日

最期まで見事です、オシメさん

斎藤清明

酒井敏明さんが亡くなって8ヶ月後の今夏、山科区御陵のお宅を訪ねた。近くで所用があり、娘さん一家が越して来ていると聞いたので。

ドアを開けていただいた娘さんは、はるか40数年も前、今西錦司先生の北山行に、酒井

さん夫妻が連れて来られ、ウチの娘ともども今西さんになついていたなど、ふと思った。

奥様との二つの位牌の前で、最期のころの話をうかがった。

酒井さんは夫人に先立たれて後、ずっと一人

暮らし。大阪住まいの娘さんが時おり様子を見に来ていたが、「まったく手のかからない父でした」。介護や入院などといった世話にもならなかったそうだ。

今年の誕生日に四条河原町で食事をした後、パンを食べたいと、京大北門前の進々堂に行ったら、イタリアから帰省中の谷泰さんとバッタリ。山岳部同期（1952年入部）どうしの久しぶりの（そして最後の）対話でした。

そして、昨年暮れ、「寒い日でした。ベッドの側に倒れていました」。きちんと戸締りをし、パジャマに着替え、就寝しようとして心臓発作に見舞われたよう。

最期まで、しっかりされていたのだ。オシメさんらしいな、と感動した。わたしも、かくあ

りたいた。

山岳部で12年後輩の私は、厳しいリーダーだったとうわさに聞いていた。でも、AACK50年史『ヒマラヤへの道』（1988年）の執筆でお世話になり、詳細な年表も作成していただいた。AACKの記録づくりなどアーカイブ事業にも尽力された。

初盆を迎えた娘さんからメールをいただいた。

「父は何よりも山のお仲間や活動を生きがいとし大切にしてきました」

「じっさい90歳を超えても関わり合える場があることが、大きな大きな支えとなっていたと思います」

酒井オシメさん追悼

前田 司

1964年4月、小生1回生の春山報告会はルームでなくどこかの講義室でOBも多く出席され、えらい緊張の中で開催された。というのはこの春山で1回生を含むパーティが北海道2、東北1、北アルプス2の5隊が出たが、このうち命にはかかわらなかったものの、アクシデントを起こした隊が4つもあり、中でも北海道の日高山脈縦走の2隊のうち早大尾根—ペテガリ隊が札内川への下山の時、小生と同期の前田琢磨がシリセードの失敗で木の枝で頭を打つ怪我をして、それが地元の新聞で報道されちょっと大ごとになった。安岡リーダーの報告の後、うしろの方に座っていたOBから「シリセードって何ですか？ そんな技術は知りません」との質問があった。恐る恐る振り向いて質問の主を見ると、この人がインドラサン遠征隊副隊長の酒井オシメ（敏明）さんであった。雪山でこんな快適な手っ取り早い下山の術をこの人はほんまに知らんのだろうかと思う反面、怖そうなお人やなーというのが初めてほんまものオシメさんを見た第一印象であった。

現役時代鎖国のネパールに入国のパーミットを依頼する手紙の添削を文学部英文科出身の酒井オシメさんをお願いに行ったが、添削どころか一から書き直した手紙文が返ってきたが優し

く対応していただけたのを感じている。

小生もOBの仲間に入れていただいた1993年、オシメさんからキリマンジャロへ行かないかとお声がかかった。新井浩先輩や伊藤クルンパ（宏範）は夫婦で参加するそうである。小生の家内もアフリカなどの野生好きなので、ペアでの参加を小生の独断で申し込んだ。しかしいざ計画が進んでゆくと家内が5000メートルの山登りに不安を抱き、オシメリーダーに不参加を申し出た。するとオシメさんから、「それは困る。一人減ったら団体料金で行けなくなる」との返事があり、家内は主治医の齋藤Y（惇生）先生に相談すると「3000メートルあたりでカメレオンと遊んどいで」と言われそのつもりで参加することに。さて登山が始まると道中は長いがさほどのしんどさはない。クルンパの高山対策の薬のおかげもあって、2日目にはすでに富士山よりも高いところまで登ってきた。オシメリーダーは最後尾から特に夫婦連れを見守りながらポレポレゆっくりペースでついでこられるので実に安心。知らぬ間に4700メートルのキボハットの小屋まで登り、そして夜中の出発で山頂へと優しく導いていただいた。

1998年、AACKにとって誇るべきチョゴリザ初登頂から40周年の年。登頂者の平井ボコ

(一正)さんからチョゴリザを見にゆくバルトロトレッキングのお誘いを受けた。学習院の山岳部からOGが2人、JAC京都支部からも女性が2人参加するのでおまえの奥さんもどうや、とオシメさんの推薦で声をかけていただいた。家内もオシメさんが行かれるのなら安心と今度はえらい乗り気である。このトレッキング、当時のチョゴリザ隊員の参加は時間の都合で平井ポコさんだけになったが、ポコさんには今回は気楽な旅、ガイドのアリと思い出話をしながらどんどん先をゆく。すると全体を見渡せる人はやっぱりオシメさん。今回も最後尾についてとりわけ一番の素人の家内を見守っていただいた。おかげでコンコルディアまで無事に到達することができた。優しいオシメさんのおかげである。

AACK 創立 80 年を迎えた 2011 年の総会で元会長の高村デルファー（泰雄）さんから「チョゴリザ以降の AACK アーカイブスの整理、保存が必要ではないか」との提案が出て、その方向で進めるべしの決定がされた。そこで当時の事情を知る会員から酒井オシメさんを長として平井ポコ、高村デルファー、事務局長の竹田スイッチョン（晋也）に加えて、なんの遠征の体験もない小生を入れてアーカイブス委員会が作られた。古本屋として過去の歴史資料を商う小生を委員に加えられたのは酒井オシメさんである。委員会では先ず 1960 年代のノジャック以

後 10 年間を対象に取り組むことになった。この委員会の活動については本誌 No.58、62 号に酒井委員長が詳細に報告されているのでご一読いただきたい。このアーカイブス収集、整理、保管の作業の中で、調査対象の時代とは離れるが「西堀書簡」の移管そして複製制作は大いに誇れる作業であったと思う。この書簡とは 1952 年 1 月から 3 月まで西堀榮三郎先生がインドおよびネパールから今西錦司先生宛に出された一連の書簡に、帰国後西堀先生がネパール政府宛に出された手紙のコピー、ネパール皇太子からの返信や先生が書いたスケッチやメモ類など約 50 点、総数 350 ページに及ぶ 2 冊のファイルをさす。AACK がヒマラヤの未踏峰マナスルの登山許可取得活動の最初期の資料として AACK には第 1 級のアーカイブであるが、これをマナスルの初登頂者の今西寿雄氏が所持、その後日本山岳会関西支部が保管されていたのを酒井委員長が粘り強く交渉して AACK に移管された。委員会に届いて紐解いた時、本物の資料のみが持つオーラに興奮したのを覚えている。そのうちの主要な書簡を複製して、表紙、目次、解説をつけて冊子に仕上げ、AACK 保管用、西堀先生ご遺族・日本山岳会などに配布された。この一連の作業は酒井オシメさんの功績である。

合掌

酒井敏明さん

横山宏太郎

酒井敏明さんは 1952 年京大山岳部入部。部のリーダーを務められた。その期ではサブリーダーは左右田健次さん、マネージャーは谷泰さんである。

AACK の会合に参加するようになって、酒井さんのお顔とお名前が結びついた。時折難しそうな表情も見せられるがふだんは穏やかな話ぶりで親切的な先輩であった。しかし現役時代は北方稜線から剱岳の極地法合宿で登頂隊員に選ばれていることからもうかがえるように、まさに部を牽引するリーダーだったのだろう。1960 年のノジャック隊では同峰の初登頂を果

たし、1962 年には山岳部のインドラサン隊で副隊長を務められたことから、実力ある登山家としての存在がわかる。

その後かなりの期間、ヒマラヤ登山の現場からは遠ざかっておられたが、1989 年、梅里雪山登山隊（第 1 次隊）では副隊長を務めていただき、たいへんお世話になった。隊長は左右田先生だった。この隊で私は登攀隊長を務めたのだが、いざ登攀にかかってみると、ルートに選んだ氷河の状態が、上部では予想以上に厳しく、危険性が極めて大きいことから撤退することになった。私の責任だが、前年の偵察では氷河上

流部の状態が充分には把握できていなかったことが悔やまれる。

隊のメンバーのうち、私は事情で現地入りが遅れた一方、左右田隊長は都合で早めに帰国された。このようななか、酒井副隊長は本隊の一員として現地に入ってからずっと、私達が上部で活動している期間も、ベースハウスとベースキャンプに滞在し、登山を見守ってくださった。そして、最後には隊を率いて帰国された。私にとっては、酒井副隊長の存在はたいへん心強いものだった。おそらく、ほかの隊員たちも同じように感じたのではないだろうか。あらためてお礼を申しあげたい。

AACKは1931年の創設だからすでに90周年を過ぎ、100周年が近づいてきた。90周年になにか記念事業をするかどうか、という相談もあったが、記念の会合などは見送られた。私は、せめて50年史である「ヒマラヤへの道」(1988年、中央公論社)のあとの動きをまとめることはしておくほうがよいと考え、酒井さんに相談して、協力していただけることになった。

それまでに酒井さんは1970年代以降のAACKの歴史をずっと記録されており、AACK時報に掲載されたそれら貴重な成果を中心にしてまとめていけば、「ヒマラヤへの道」の続編が出来るのではないかと期待していた。ところがそのあと私の怠慢のせいで、ことはいっこうに進まないまま、酒井さんの訃報に接することになった。まことに申し訳なく、また残念なことだった。

酒井さんは「世界の屋根に登った人びと」(2005年、ナカニシヤ出版)を著された。地理学者として、自身の体験、調査に加え、広範囲で数多くの文献資料を参照し、日本と世界の山について様々な角度から論じておられる。酒井さんの「山」との関わりの集大成とってよい

だろう。地球の大きさ・形を測量する話や、中央アジア探検史など、もちろん興味深い内容ぞろいだが、この書にはその前段として、「序章一山にのぼる」がおかれている。「登山とは何か」という問いに対する、酒井さんの答えがそこにある。いろいろな書物などの説明を参照したうえで、

「登山とは、みずからの知的探求心をみたすために、みずからの能力を駆使して山に登る行為をいう」

という定義を提唱する。未知の世界に踏み込みたいという気持ちをこめて、「みずからの知的探求心をみたすために」、また、それが困難な場合にはその障碍を克服してこそ価値があるとの意味をこめて「能力を駆使して」とした、と補足説明がある。

これが、つまり、酒井さんの山との向き合いかたということなのだろう。また、それは、私の気持ちを代弁してくれるようにも感じられる。

ここからの感謝とともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

参考

酒井敏明著・AACK 時報掲載記事

No.1 (1962年2月) サルトロ・カンリ小史

No.2 (1963年7月) 会員紹介・谷泰氏

No.5 (1966年5月) AACKは解散すべきか

No.9 (1982年9月) AACKの動きーヤルン・カンからカンペンチンまで

No.10 (1987年5月) AACKの動きーカンペンチンからナムナニへ

No.11 (1994年5月) AACKの動きーナムナニから崑崙へ

No.12 (1994年9月) AACKの動きー梅里雪山隊と医学隊

同上

梅里雪山学術登山

サルトリ口・カンリ (7742m) とノシャック (7492m)
AACK ウェブサイト (aack.info) より



写真1 サルトリ口・カンリ：Pk36 氷河を C1 に向かう



写真2 サルトリ口・カンリ正面。左から岩坪、加藤、平井



写真3 サルトリ口・カンリ頂上の齋藤惇生さん（左）
とラジャ・バシールさん（1962年7月24日）



写真4 ノシャック頂上の酒井敏明さん（1960年8月17日）



写真5 ノシャック：カジデー氷河上4500mのC2、
正面は西峰7250m



写真6 ノシャック：登頂の朝、頂上稜線のかなたに
本峰最高点

事務局だより

3月3日、齊藤Yさんのお見舞いに横山コータロー理事と一緒に伺いました。最初の予定ではお見舞いは3月20日頃としていましたが、コータローさんとの相談で2週間前倒しすることになり、Yさんと最後のお別れをすることができました。昨年10月終わりにお見舞いに伺った時と比べると、言葉は少なくなっておられました。私達をはっきり認識していただき、病室を出る際には、握手をしてツァイツェン（再見）と言われました。その1週間後、Yさんは旅立たれました。生前と同じように、Yさんは今もAACKを温かく見守ってくださっていると思います。酒井オシメさんのご逝去は突然でした。4年前は、web配信でしたがAACK総会でノシャック峰初登頂の講演をいただき、昨年の総会でも、少し耳が遠くなられたとはいうもののお元気にされていました。今年の総会でもお目にかかれると思っていましたが叶いませんでした。

今年の夏は異常に暑い。7月終わりに笹ヶ峰ヒュッテに1泊しましたが、昼には30度近くになりました。笹ヶ峰牧場の遊歩道を一周し泉にも立ち寄りしましたが、湧き水が途絶えています。しばらく雨も降っていないのでしょう。今日は8月最後の週末で週明けは9月になるというのに、あちこちで40度超えています。秋が待ち遠しい。

会員動向

訃報

山本武久 2024年1月26日逝去
原田 浩 2025年1月17日逝去
奥宮清人 2025年6月19日逝去

会員異動

根岸哲生 自宅住所・勤務先変更（訂正）

編集後記

予定より少し遅れて、113号をお届けします。齊藤惇生さん、酒井敏明さんにたくさんの追悼文をお寄せいただき、ありがとうございます。

猛暑がようやく終わり、秋らしい日も増えてきました。前号で米価格の安定を願ったところですが、残念ながらまだ混乱は続いているようです。

当地では猛暑に加え水不足にも見舞われました。春先の土砂崩れで重要な導水管が破損したところへ、6月終わりごろから8月の初旬までほとんど雨が降らなかったためです。8月後半もあまり降りませんでした。JR上越妙高駅と上越教育大学の消雪用井戸の水を臨時の送水管で浄水場に送り、市民の節水もしだいに効果を発揮し、ぎりぎりです断水は回避できました。

雨が少なかったことは中山間地の天水田や灌漑水源の能力が小さい地域などで大きな影響が出ました。作期の遅い品種では、8月前半の雨でなんとか持ち直したようです。

9月にはかなり雨が降りましたが、そうなるコンバインが水田に入れず収穫作業が遅れるという負の影響もありました。

米作りは（農業全般に言えることですが）気象に大きく影響を受ける、たいへんな仕事だと思います。米の生産が安定し、米農家も消費者も安心できる適正な価格で米が流通するように願っています。

原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2025年10月20日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町
京都大学総合博物館 高井正成 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
（株）土倉事務所